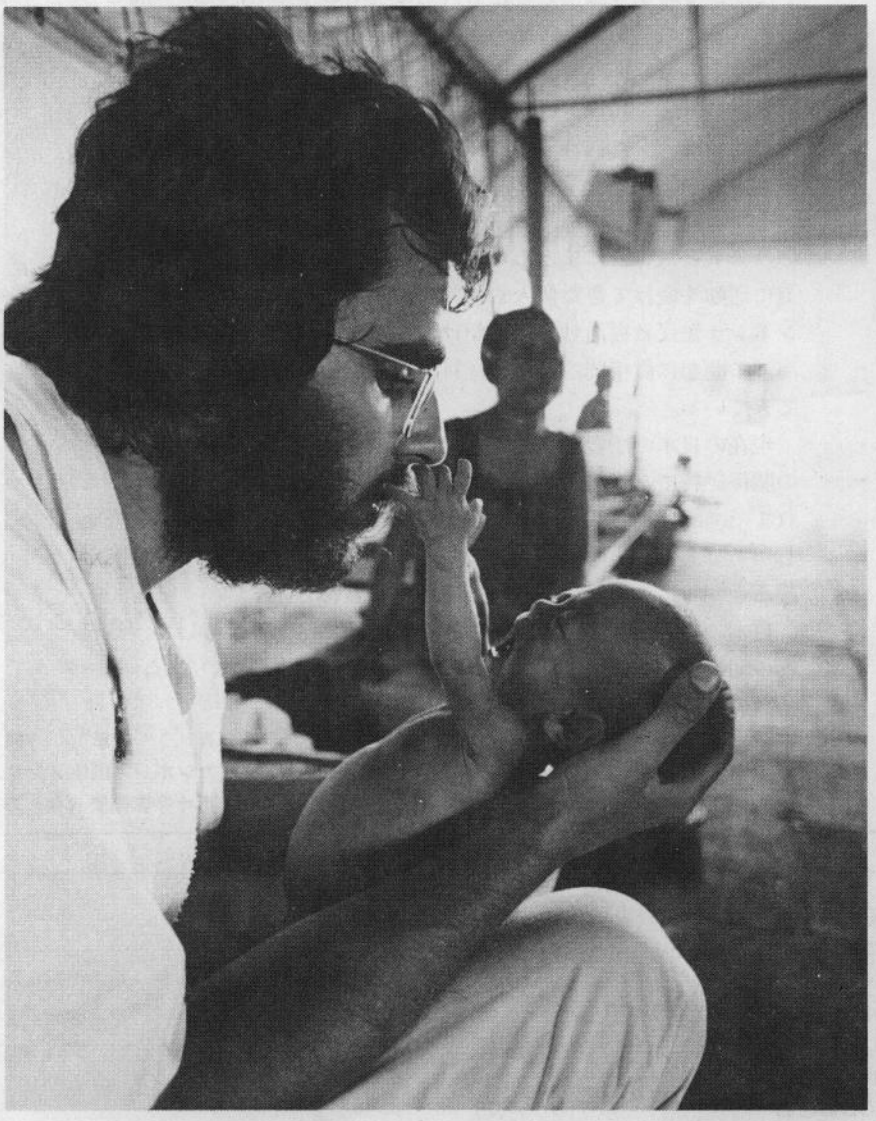
発行日　昭和58年11月20日発行（毎月20日発行）通巻31・32合併号
昭和57年8月16日第三種郵便物認可

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

——試行錯誤——

特集　救援活動の担い手



JAPANESE VOLUNTEER CENTER

'83 Autumn
No. 31・32 合併・季刊号

はじめに

難民が発生するような事態は，これ以上起ってはならない。

その難民を保護したり，救援活動をするための機関など，本来あってはならないものだ。UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）が暫定的な機関として存続しているのも，そのような背景による。

しかし，そのUNHCRが毎年何億ドルもの予算を使い，何百もの民間団体や無数の個人が，難民のために活動を続けなければならない状況は，残念ながらまだ当分の間続くことになるだろう。

難民問題は，国際社会における東西・南北その他様々な政治的対立や経済的なひずみとか，各国内の社会的矛盾といったものが絡み合って現われた，いわば症状であり，原因をそのままにした単なる人道的な救援活動は，対症療法にすぎないという指摘もある。

だが，そのような空しいとも言える現実の中でも，現に人間として生きるために保護と援助を必要とする人が存在する以上，自らの命ずるところに従って活動に参加し，あるいは自ら組織し，彼らと向き合って生きてゆこうとするボランティアは後を絶たない。

近年日本でも，海外での救援・協力活動において民間の果す役割の重要性が認識されてきたようだ。日本国内の民間団体については，NGO研究グループが'82年秋から調査を行い，その結果が団体別のリストと報告書にまとめられた。日本にはこれまで数十年間も地道に活動を続けてきた個人や民間の団体がいくつかある。それがインドシナ難民救援活動をきっかけに，市民レベルの多くの人々が，海外の問題に直接関心を示し，具体的な活動に結びつくようになってきている。

現在の日本の「豊かさ」— 毎日の生活そのもの — が，諸外国との関係，特にアジアと相互関係の上に成り立っている。ところがこれまで国際協力・交流はほとんどが政府・企業レベルの関係に終始しがちであった。一般の人々の間から，そうしたあり方への疑問が起ると同時に，自らの参加の糸口が求められている。

日本の民間団体が欧米のやり方に盲従するべきではないが，政府との関係など組織的な問題でも，個人の関わり方においても，学べるものは少なくない。

表紙写真　撮影　押原　譲
タイ・カンボジア国境ノンサメット難民村，
ICRC（赤十字国際委員会）の病院にて

目　次

// 特集 // 救援活動の担い手

なぜNGOなのか …… 4
NGOの背景・形態および問題点 …… 5
UNHCRとの関係でNGOが果たす役割 …… 6
ICVA・IRIRC …… 7
緊急救援におけるNGOの活動 …… 8
資料・海外NGOの活動 …… 10
MSF …… 12
トピックス
世界の難民情報 …… 15
地図・世界の難民 …… 16
CUSO …… 18
インタビュー・タイで働くボランティア …… 20
ソマリア・JVCのアリさん …… 22
私の出会った外国人ボランティア …… 24
声 …… 26
JVCプロジェクト …… 28
JVCNEWS …… 30

特集 救援活動の担い手

＜用語の意味と使われ方＞

NGO non-governmental organization；非政府組織。非営利の民間団体という意味で使われている。国際機関や OECD などが，政府および政府間組織・赤十字などの国際組織以外に関係を持つ民間組織について用いている語が一般化したものとみられる。

非営利の民間団体と言っても様々な形態がある。公認された法人もあれば，全くの任意団体もある。宗教団体，組合，消費者団体や各種の市民運動体なども NGO である。

PVA private voluntary agency または organization；アメリカではNGOにあたる語として使われているという。official（公的機関）に対して，民間の主体的な組織という意味。

ボランティア／奉仕　日本語には volunteer に対する適切な訳語がない。英語では「自由意志に基き，自ら進んでする者。志願兵。」などの意味であり，自発的な行為をするというニュアンスが強い。一方日本では，ボランティアは「人のため，社会のためにつくす，仕える者。奉仕者」であって，無報酬で働く人といった意味で使われていることが多い。

またイギリスなどの救援活動の関係者の間では，volunteer を，プロとして働く人に対して勉強中の人という意味で使うこともあるという。

援助・協力と救援

〝援助〟(aid ,help ,support, assistance) という語が，一方的な関係を示すという，途上国側からの異議によって，その実態はともあれ〝協力〟(cooperation) と言い換えられるようになってきた。開発の問題は先進国の人々と途上国の人々相互の問題だからである。

一方〝救援〟(relief) は非常事態における，人権の保護および人間としての基本的必要 (basic human needs) の確保を目的とするものである。

なぜ民間団体が重要なのか

「開発協力において NGO の役割が重要視されている理由」として NGO 研究グループは次の 6 点をあげている。

1. 発展途上国政府の要請で行なわれる先進国の ODA《official development assistance：政府開発援助》が，これまでとかく被援助国のなかの経済的・社会的格差を拡大しがちであるのに対して，ＮＧＯによる開発協力は，相手国の特に貧しい民衆を直接支援することができる。
2. 開発問題に積極的な関心をもつ人々が自主的に組織し，運営する NGO は，官僚主義にわずらわされがちな公的開発援助とちがって，心ある協力活動を速やかに，また弾力的に行なうことができる。
3. NGOはODAの対象になりにくい小規模の開発プロジェクトに直接参加し，きめのこまかな協力活動をすることができる。
4. NGOによる開発協力活動は，ODAの提供にともないがちな相手国の権力者の間のコラプション《腐敗・賄賂》にまきこまれない。
5. NGOは公的な援助機関に比べて，同じ種類の協力活動をより少ない費用で効率的に行なうことができる。
6. NGOは，政治的（外交的）な理由によって ODA の対象にならないような民衆グループの自主的な開発努力を直接支援することができる。

《　》編集部

これらの理由は，ほとんどそのまま緊急救援にもあてはまる。特に 2.の即応性と弾力性については，NGOこそ緊急事態にその力を発揮できるのである。

緊急事態における NGO のメリットを挙げてみる

1. 政府ベースでは，方針，計画，予算の決定に慎重にならざるを得ず，時間がかかるが，NGOでは迅速に対応できる。
2. 難民問題のように，政治的外交的に難しい状況にあっても，NGOは政府間の関係にとらわれずに活動できる。
3. 政府，特に在外日本公館は邦人の安全の確保を使命としており，戦闘状態などにある危険は地域へ人を派遣できないが，NGOは個人の意志と責任において，まさに必要とされるところへ人材を送ることができる。

DAC 17ケ国のGNP，ODA およびPVAs による援助額等（1980年）

国　名	A．人　口（1,000人）	B．GNP（10億ドル）	C．ODA額（100万ドル）	F．PVAs 援助額（100万ドル）	NGOs 数	人口 100万人当りのNGO数
オーストラリア	14,616	137.7	657.0	39,8	24	1.7
オーストリア	7,509	77.0	172.7	23.5	39	5.2
ベルギー	9,857	118.8	580.7	45.0	93	9.5
カナダ	23,941	246.4	1,036.2	102.0	150（200）	6.3（8.4）
デンマーク	5,125	64.7	467.6	12.9	50	9.8
フィンランド	4,780	49.2	106.0	15.5	49	10.3
フランス	53,713	652.2	4,052.7	35.7	120	2.2
西ドイツ	61,566	824.7	3,517.4	120.7	111	1.8
イタリア	51,042	394.0	672.4	3.1	64	1.1
日　本	116,782	1,039.7	3,303.7	26.4	35（86）	0.3（0.7）
オランダ	14,144	158.7	1,577.2	78.7	78	5.6
ニュージーランド	3,131	22.2	71.2	6.8	15	4.8
ノルウェー	4,087	57.3	472.8	33.0	35	8.8
スウェーデン	8,316	121.6	923.1	59.0	85	10.6
スイス	6,373	103,6	246,3	63.2	69	10.6
イギリス	56,010	526.6	1,780.9	104.7	112	2.0
アメリカ	227,658	2,626.5	7,138.0	1,301.0	429（528）	1.8（2.3）
合　計（平均）	674,650	7,220.4	26,775.7	2,370.9		

ＮＧＯ研究グループ「わが国のＮＧＯによる，開発協力の現状と展望」'83 年 3 月より

資料：OECD "Development Co-operation" 1981
（　）内の数は別の資料による。

NGOの背景・形態および活動上の問題点

1. 背景／NGOの成り立ち

①実質的に政府の政策の範囲内にあるNGO

②民間企業による利益の社会的還元の性格をもつNGO，または企業の所有者の寄付によるもの

③宗教団体の活動の一環としてあるNGO，または宗教的精神に基いて設立されたNGO

④草の根の市民，一般民衆レベルから生れたNGO。中には医療機関など，専門的・職能的な性格をもつものもある。

⑤その他，西ドイツにみられるように政党を背景とするものもある。

2. 活動の形態

①資金援助

②技術援助（人材派遣または研修員受入）

③物資援助

④情報収集，広報，開発教育，研究等

⑤その他，国際社会，政府への提言・圧力等

（以上は，「NGO研究グループ」の報告に基く）

3. 活動上の問題点

●活動の計画，実施および評価　現地の必要に基づいて，ひとつのプログラムが実施されるまでには，それを実質的かつ有効なものとするためには，充分な準備が必要である。しかも緊急援助においては，情況は流動的であるから，いかに的確に現地の必要(needs)を把握しそれに対応するかが鍵になる。実施にあたっては，その目的，方法に応じて必要な人材の配置，資金の確保，関係機関との連絡調整や諸手続を行わなければならない。かつ活動の展開のために，それを個別にまた総合的に点検し評価しなければならない。緊急援助では，その計画をいつまで持続すべきか，つまり撤退の時期も重要なポイントである。

●資金　活動を組織する者にとって，資金の確保は人材の問題と並んで大きな問題である。NGOの活動は営利を求めるものではないから外部から資金を調達しなければならない。特に運営経費をいかに確保するかは，NGOにとって死活の問題となっている。

たとえば，ある国へ医薬品を送る場合，仮に寄付によって購入費がかからなかったとしても，その輸送や，現地で受けとる機関との通信連絡の費用が必要となるし，送られたものの使用法について指導する人が必要な場合もあろう。その薬が確かに届き，どのように役立てられたかをモニターする人も必要であるし，会計などの事務や報告書を作成したり，広報活動や募金活動そのものにも経費がかかる。特に緊急援助では予算通りの支出があるとは限らない。

ほとんどのNGOの活動にとって，無給のいわゆるボランティアに支えられている部分が少なくないと思われる。そのことには貴い意味があるが，NGOの活動の重要さが認識され，それに伴い責任と専門性が求められるようになってくると，とても応えきれない。

NGOは，様々のアイデアを駆使して募金活動を行ない，また出版や物品の販売などによって自己資金の獲得を計る。その他は，他の資金援助団体からの寄付，国際機関からの委託資金や政府の資出によってやりくりしている。

●人材　先進国での技術が，発展途上国での救援・協力活動にそのままあてはめられるわけではない。現地の状況に合う適正技術を持ち，現地の生活に融け込んで，しかも国際レベルの仕事ができる人材を確保するのも難しい。語学力の他にも日本的な障害がある。

欧米では，終身雇用が一般的な日本と異なり，社会経験のある人材が，仕事をいったんやめたり休暇を利用して，海外へボランティアとして出ることが比較的容易である。さらにボランティア経験が経歴や人柄を物語る要素として高く評価される。

また人材の海外派遣では，その体験を重視し教育や人材養成ないし，相手国との交流や相互理解を深め，自国へフィードバックすることも重要である。

●限界　NGOは政府の外交関係や利害に捉われないというメリットがあるが，一方では個別のNGOは国連など政府レベルの会議で正式な発言権を持っていない。そうした場ではNGOの国際的又は国内的な連絡協議会が，意見を代表することがある。

また，UNHCRの仕事のうち，実質的な援助すなわちNGOと協力すべき分野では，現地の政府との協定や同意が必要である。しかし，特に第三世界の政府の中には，難民問題という政治性の強い問題に対して，未知のNGOが関わってくることに懐疑的になっているところがある。また，超国家的な性格を持った西欧のNGOは，先進国特有の社会的性格をもっているところから，第三世界に適合しないと見なされるのであろう。第三世界では独自のNGOはまだ一般的でなく，そのおかれている状況は先進国とはかなり異っている。

UNHCRとの関係においてNGOの果す役割

「難民問題でNGOの役割は欠くことができない程重要である。UNHCRの設立は1951年のことであるが，それ以前にもヨーロッパでは，赤十字や民間の機関が各国政府と共に，難民のための国際的な活動に着手していた。それら実際に活動していた機関によって，難民のための活動の国際的な調整と法的な機能の必要性が提起されたことが，UNHCRの設立に結びついたのである。

国連には，その重要なパートナーとして限られた数の国際的なNGOが登録されているが，UNHCRはより実際的に多くのNGOと協力している。難民にとって有益であり，その活動が政治的目的のためでなく人道的・社会的な目的のために遂行されるのであれば，UNHCRはどのような機関とも協力する。NGOの大小は関係がない。

〈NGOの役割〉

1. 諮問機関の役割

UNHCRにとってNGOは，難民に対する世論を組織として代表しているものである。

2. 補助的役割

難民の保護について関係政府と交渉することや，法的保護はUNHCRが専門であるが，NGOの役割は，物質的援助の分野で発揮される。難民の健康や公衆衛生のために欠かせない，食糧や衣類や毛布などを実際に頻繁に配布するのは，NGOである。

3. 計画実施の役割

UNHCRは緊急援助や再定住などの計画の実施を他の組織等に委任している。そうした組織とは，難民救援活動に必要な経験や能力を持ったNGOであることが多く，UNHCRはこうした組織と契約関係を結ぶ。財政上のことでは，UNHCRが主要な部分の資金調達を行なう場合もあるし，関係しているNGOが人員や救援物資（医薬品，食糧など）や奨学金などの，実質的な供給をする場合もある。

UNHCR，NGOリエゾン・ユニット資料より

"REFUGEES" '83 10月号 EDITORIALより

UNHCRは250以上のNGOと常に緊密な関係を保っている。これらのNGOは，実際に難民の声を聞き，難民が置かれている状況を把握しているので，救援活動実行の手足となる。そして，難民の状態について，熱しやすくさめやすい一般の関心を持続する上での，重要な発言力となってきた。

もちろん，UNHCRは，難民が避難している国々の協力やNGOの活動がなかったら何もできない。NGOはUNHCRの補助をしているのではなく，UNHCRや政府とともに活動しているのである。

難民の状況に関する有益な情報や知識は，NGOの現場での経験から得られ，難民を生み出す状況を最もよく知っているのはこういったNGOである。NGOによる個別の助力によって心の慰安や救済を得られた難民は多い。ボランティアによる救援活動のネットワークは，徐々にではあるが各地で形成されつつある。

どの政府も，NGOに依存している部分がある。難民救援のための国の政策や準備体制が，難民の状況に適していないことも多く，難民を外国人観光客や非合法移民のように扱うこともあるが，ボランティア組織には，地域社会に難民が定住する上での特殊な問題に対処するために不可欠な融通性がある。

ＮＧＯの活動は，地域レベルでも世界的レベルでも，難民援助を方向づけるという，欠くべからがる役割をもっている。

難民の状況に対して，ＮＧＯがより活動的にまた複雑になることが求められているが，これは一方ではＮＧＯが官僚化する危険を伴っている。このことを警戒しなければ，ＮＧＯの自発性やボランティアとしての性格を殺してしまいかねない。

ＮＧＯは一般社会の各方面からの支持によって動くことができる。ＮＧＯは国際的な会議等ではオブザーバーの地位でしかないが，ＮＧＯは各国の人々の人道に対する関心を体現している。

（翻訳および文責，編集部）

International Council of Voluntary Agencies.

ＩＣＶＡとは

ＩＣＶＡとは，世界中のボランティア団体の発展・成長，活動の向上をめざして設立されたボランティア団体の国際連合組織で，自主独立を旨とし，中立の立場をとっている。

1962年にジュネーブで発足し，ボランティア団体間の協議と協調を司どる常設事務組織としての役割を果たしている。ＩＣＶＡにとっての"ボランティア団体"とは，利潤を求めない非政府組織，団体，財団等で，国際的広がりを持ち，活動が人道的性格のものでなければならない。

ＩＣＶＡでは，会員団体の抱える種々の問題点を協議する"総会"を最低５年に１度開催し，これには政府関係のオブザーヴァー，政府間組織，及びこれに関心を持つ他の団体も出席する。

ＩＣＶＡの役割りは，それ自体で開発とか援助計画を履行することではなく，会員団体がより効果的に仕事を進められるようにする点にあり，現在，"難民と移住""統合された人間開発""ボランティア団体の協調と資金調達"に関する３つの分科会が組織されている。

ＩＣＶＡの本質的機能のひとつは，会員団体が取り組む救援や開発問題に関する背景情報を伝える点にある。こうした分野で活動する機関の事業計画の報告，討議の場として「ＩＣＶＡニュース」を発行している。又，事業計画を提出している（特に第三世界の）団体に，適切な資金調達の助力をしている。

ある団体が個別に事に当たるには問題がデリケートだったり，複数の団体が協同で取り組む方が有利な場合，ＩＣＶＡがこれら会員の代理として，政府間組織や政府関係との折衝に当たることがある。

ＩＣＶＡは国連経済社会理事会のカテゴリーＩを含む18の政府間組織と類似の資格を持ち，諮問機関としても働いている。これは，国連の会議などに常に出席することが難しい小規模団体にとっては重要で，ＩＣＶＡがその立場を少しでも有利にする助力ができる。

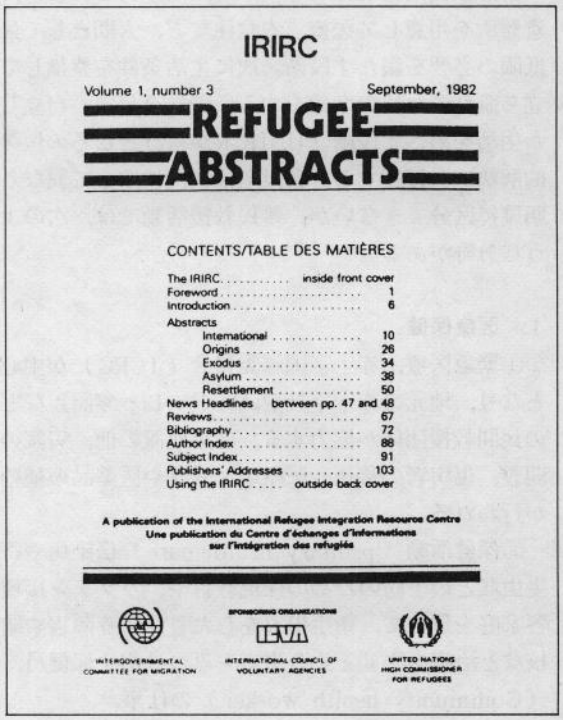
ＩＣＶＡは，ＩＣＶＡニュースを通して国際雇用登録を設け，世界中のボランティア団体の人員配置を促進している。又，資金獲得の助力もその目的のひとつで，公的資金および民間資金調達の情報やテクニックを発表したり，資金を出すのにふさわしい事業計画を持つ団体を出資機関等に紹介したりしている。

IRIRC

International Refugee Integration Resource Center は，1980年10月にジュネーブで設立され，Intergovernmental Commitee for Migration（ＩＣＭ），ＩＣＶＡ，UNHCRが共同で経営している。

ＩＲＩＲＣは，難民の受け入れ，定住，統合に関するあらゆる情報を収集，提供するためにつくられた国際的な情報交換センターである。各国で定住計画がうまく実施されるよう補助することを目的に，情報の提供・交換，のシステムをつくったり，共同研究グループをつくり会議を開催したりしている。難民定住事業に従事している主要な政府機関，政府間機関，NGO等の間を結びつける役割を果たしているわけである。

会報「Refugee Abstracts」は年４回発行され有用な本，記事，ドキュメントからの抜粋と評論が書かれている。これらの情報はいつでも提供できるようにコンピューターに記録されている。その他の活動としては，難民に関する用語辞典の編集，難民救援に関わる政府，政府間，非政府機関の国際的名薄，難民統合問題の専門家名薄などの発行も予定されている。



IRIRC

Volume 1, number 3 September, 1982

REFUGEE ABSTRACTS

CONTENTS/TABLE DES MATIÈRES

The IRIRC ..... inside front cover
Foreword 1
Introduction 6
Abstracts
International 10
Origins 26
Exodus 34
Asylum 38
Resettlement 50
News Headlines between pp. 47 and 48
Reviews 67
Bibliography 72
Author Index 88
Subject Index 91
Publishers' Addresses 103
Using the IRIRC ..... outside back cover

A publication of the International Refugee Integration Resource Centre
Une publication du Centre d'échanges d'informations sur l'intégration des refugiés

SPONSORING ORGANIZATIONS

INTERGOVERNMENTAL COMMITTEE FOR MIGRATION

INTERNATIONAL COUNCIL OF VOLUNTARY AGENCIES

UNITED NATIONS HIGH COMMISSIONER FOR REFUGEES

緊急救援におけるNGOの活動

緊急救援（Emergency Relief）　緊急事態あるいは非常事態は，国際紛争や内戦ないし大旱ばつ，地震，洪水などの発生によってひき起こされる。

非常事態におかれた人々は，その場においても救援を必要とするが，しばしば人々は生きるためにまた身の安全のために，住み慣れた土地を離れなければならない。こうして難民（Refugeesおよび displaced persons）が発生する。

緊急事態の原因は，多くの場合複雑な政治的国際的な背景をもっており，解決が容易でないことから，慢性的な非常事態が続き，多くの難民が何年間も不自然な生活を強いられる。

また現在世界中で難民の状態にある人々の大多数が開発途上国から流出し，その隣国に留っている。これらの諸国の経済的基盤の弱さのために，難民の流入は庇護国の負担となっている。経済的問題は，難民流出の遠因でもあり，また難民が自国に帰ることが可能となった場合でも一時庇護国へ定住することになった場合でも，難民が援助に頼らず自立していくための障害となっている。

緊急救援活動にはいくつかの段階がある。まず，避難所を用意して医療，衣食住など，人間として最低限の必要を満たす段階。次に生活条件を整備して，立ち直りのための準備をする段階。そして，自立した生活をめざす段階（UNHCRが言うところの恒久的解決）へ移行する。各段階は状況によって異なり，明確に区分できないが，難民救援活動では，次のような分野がある。

1.　医療保健

①緊急医療，赤十字国際委員会（ICRC）が中心となり，地元の赤十字社や，MSF（12p.参照）などの民間救援団体が協力する，応急処置の他，病院の開設，傷病者の移送，医療スタッフや医薬品の補給が行われる。

②保健活動（primary health care）伝染病や寄生虫などの予防のための保健教育や，ワクチン接種。各家庭を廻って，衛生指導をしたり，栄養障害や結核など治療を必要とする患者をみつけ出す保健員，（Community health worker）の仕事。

③人材養成　難民の中に医療知識のある者がいない場合，看護婦，助産婦，保健員，技師などの訓練が行われ，救援団体の活動を肩代りするようになる。

2.　物資供給

食糧　大量の食糧を継続的に供給しなければならない。資金的にも規模が大きく，国連機関であるWFP（世界食糧計画）などが中心となり，関係政府やNGOの協力を得て実施する。現地調達が原則であるが，穀物や缶詰などが輸入される場合も多い。

基本的な生活必需品　仮住いのためのテントやビニールシートなどの資材（地域により竹や木材・レンガなど）の他，毛布，衣類，台所道具・石けんなどの配給は原則的に国際機関が担当するが，その輸送，配給にNGOが協力する。

その他の物資援助についてはNGOが，現地の必要に即して独自に，調査し調達し供給する様々な場合がある。単に配給するだけでなく，医療機材，教材などNGOの実施するプロジェクトの一環として供給されることも少なくない。

3.　水の供給および公衆衛生

まず飲料水として衛生的な水を確保しなければならないが，途上国ではしばしば地域の人々自身が水の不足に悩まされている。多人数の生活用水をまかなうためには大量の水が必要になる。近くに水源がない場合には遠くから，給水車などで運搬したり，水をひかなければならない。水を得るために，井戸の掘削や貯水タンクの建設，ポンプや浄化設備の設置が組織され，多くのNGOが活動している。

また多くの人間が限られた場所で生活するため，伝染病などの予防の意味でも，トイレ・下水の建設や汚物の処理のための手だてが必要となる。

4.　建　設

基本的な住居は，国際機関や受入国政府の協力によって確保される。民間団体が建設するのは，病院やコミュニティーセンターなどの共同施設や，自らが使用するものに限られるが，難民の住居の修理材量の供給など，管理的役割を民間団体が果すこともある。

5.　栄養補給と補助給食

特に栄養状態に留意すべき人々，すなわち5才以下の子供，妊産婦，授乳期の母親，慢性的な病気に

患っている者等には補助給食が必要となる。栄養士が対象となる人々の食生活に合わせた献立をつくる他，各家庭を廻って栄養状態を調査したり，栄養の知識や料理法などを指導する。

6. 社会福祉サービス

老人・未亡人・保護者のない子供・心身障害者などの福祉の向上をめざす多様なプログラムがある。難民の中から，カウンセリング・家庭訪問・衛生教育等を行うソシアルワーカーを訓練するのもそのひとつ。また身体障害者のためのリハビリテーション用具の製造訓練なども行われる。

7. 教　育

子供を含めた難民の将来の必要性に合致した救育活動が望まれる。難民が第三国へ定住する場合，必要な外国語学習の希望が強いが，戦乱や開発途上国に一般的な事情によって難民の文盲率は高い。そこで難民の母国語による初等教育や，成人に対する識字教育のプログラムが用意される。難民の中から教師を養成することも重要である。

8. 技能訓練

キャンプでの生活にはりを持たせ，時間を有効に生かすために行われるが，同時に将来本国に帰ったり，他の国に定住した後，自立した生活を送るための重要な要素ともなる。農業や織物・窯業などの手工芸や，裁縫，石けん製造やブリキ加工などの技術を習得することによって，キャンプ内の日用品をある程度まかなうこともできる。

9. 第三国定住のための語学訓練とオリエンテーション

インドシナ難民の場合は非常に多くの人々が，第三国に定住することになったため，UNHCRや受入国政府，およびＩＣＭ（政府間移民委員会，Ｔ/Ｅ24号参照）が中心となり，定住のための手続きが行われている。定住のための様々な援助は，各国に移動した後も多くの民間団体によって行われるが，難民キャンプで行われる部分も大きな比重を占めている場合が多い。

10. 保護者のない子供たちの親捜し

混乱状態においては，離ればなれになったまま親や家族の消息がわからなくなってしまう子供が少なくない。特別の保護および組織的な親捜しが必要となる。

11. その他

外国にいる親戚や知人と，連絡を取り合ったり，援助を受けるために，郵便物やお金の取り扱いが組織されることもある。また，不自然な状況に多数の人々が生活する難民キャンプでは，レクリエーションのもつ意味も小さくない。歌や踊りなど伝統芸能のクラスが設けられたり，サッカーなどの球技の試合が民間団体によって催される。

救援活動の問題点　食糧援助が本来必要としている人々の口に入らず，横流しされたり，難民自身によって換金されてしまうことがある。また人道的な立場からの援助であっても，兵糧として政治的・軍事的な意味を持ち，特定の勢力へ流されたり，紛争そのものを長期化させる要因ともなる。難民の集結地がゲリラ戦の補給地である例も少なくない。たとえばタイ・カンボジア国境でのＷＦＰの配給のように，配給を受けられるのを女子のみに限るような工夫もされるが，いずれにせよ，援助の持つ意味とその方法は常に検証され続けられなければならない。

ジブチにおける医療活動（UNHCR提供）

海外のNGOの活動

このリストは，JVCが今年7月に行ったアンケート調査にもとづいて作成した。発送数21，うち回答のあった団体は以下の16。

名　　称	性格・特徴	●実施 ○出資	本　部 スタッフ数 有給 （無給）	現　場 スタッフ数	'83予算US $ 出　資　者	活動地，活動内容
NOVIB （オ ラ ン ダ）	開発 開発教育，	● ○	125 （2）	－	2,000 万ドル 一般・政府	現地の民間団体と協力しての開発活動，教育，農業，技術訓練／タンザニア，スリランカ等13ケ国
VSO Volunteer Service Overseas （イ ギ リ ス）	開発	●	65	862	政府，会員，一般，企業	教育，技術者養成，農業，医療保健，社会開発／中国，フィリピン，スリランカ，バングラデシュ，ケニア，ウガンダ，エジプト，ガーナ，ドミニカ等
SAWS Seventh－day Adventist World Service （ア メ リ カ）	開発，救援 キリスト教	● ○	10		教会，一般，政府	（救援）食糧，医療，保健 ケニア，ウガンダ，ブルンジ，フィリピン，ハイチ，ホンジュラス，ボリビア，インドネシア，タイ等
Austcare （オーストラリア）	難民救援 （キリスト教団体等）	○	30	2	一般，政府	食糧，医療，物資，教育保健，定住促進 ボツワナ，ケニア，レソト，バングラデシュ，中国，タイ，カンボジア コスタリカ，レバノン，ヨルダン等
ICMC International Cathoric Migra- tion Commission （本部ジュネーブ）	難民，移民援助	● (○)	25	6	1,200 万ドル 政府，政府間組織，カトリック組織	(緊急援助)食糧，医療，物資，教育，保健，定住援助，公衆衛生／スーダン，ザイール，ザンビア，メキシコ，コロンビア，ギリシャ，タイ，フィリピン，ポルトガル，トルコ，イスラエル等
MHD MALTESER HILFSDIENST （西 ド イ ツ）	緊急救援	●	2	14 （22）	320万ドル ドイツ・カリタス，一般	医療，水の浄化，建設 タイ，アルゼンチン，ソマリア，エチオピア，アンゴラ
WUS World University Service （本部ジュネーブ）	教育援助 開発	(○)	14	2	700万ドル 政府，NGO	教育，(奨学金，技術訓練)，保健，農業， バングラデッシュ，ネパール，スリランカ，中南米，南アフリカ，ジンバブエ，エチオピア，ジブチ
IRC International Rescue Committee	難民救援 開発	●			一般，教会等	医療，食糧・物資供給，教育，職業訓練，定住援助／タイ，パキスタン等
Food for the Hungry International （本部ジュネーブ）	救援 開発 広報教育	●	12	50	550 万ドル 一般・政府等	医療保健，教育，農業，雇用促進／タイ，バングラデシュ，ケニア，ボリビア，ドミニカ，ベトナム等14ケ国

CONCERN （アイルランド）	開発 緊急救援	●	20 （2）	8 （82）	250万ドル 一般，政府，国際団体	農業，建築，教育，保健，衛生，小規模事業／バングラデシュ，タンザニア エチオピア，タイ
World Vision （アメリカ）	開発 キリスト教	● ○	650	10,500	個人，教会，NGO，政府，投資収入	食糧，建築，水，医療，輸送，工具製造／エチオピア，ソマリア，ポーランド，エルサルバドル，カンボジア
The Save the Children Fund （イギリス）	子供の福祉 緊急・長期的援助	●	180	1,000	契約募金，税金収入，事業売上，一般	保健衛生，水，建設，(学校，店)，電気，病院，人材養成，教育，リハビリ，食糧／ケニア，ソマリア，ジンバブエ，ホンジュラス
MCC Mennonite Central Committee （アメリカ）	開発援助 キリスト教	●	900 以上		教会関係，一般バザー，政府，NGO	社会 福祉，保健衛生，農業，食糧，教育，水，建設，家族計画，技術援助，教会活動，奨学金／ブラジル，ソマリア，ジャマイカ，ボリビア，ザイール，ラオス，レバノン，アメリカ，カナダ，他50ケ国以上
OXFAM （イギリス）	開発援助	● ○	資料なし		1,190万ポンド 一般，チャリティーショップ，政府，EEC，NGO	保健衛生，農業，社会福祉，医療，資金援助，小規模事業など1,550プロジェクト（'83） アンゴラ，バングラデシュ，チャド，ビルマ，ギリシャ，ホンコン，カンボジア，イスラエル，韓国など72ケ国
MSF Medecins Sans Frontieres （フランス）	緊急救援 医療関係者のみ	●	22	215	700万ドル 一般	医療援助 タイ，ザイール，スーダン，ウガンダ，ホンジュラス，ニカラグア，マレーシア，ギニア，モーリタニア，マリ，ルワンダ，ラオス，アフガニスタン等
CARE （アメリカ）	緊急救援 開発	●	本部契約 現地雇用	約400 数百	3,550万ドル （'82） 一般・政府等	食糧・物資供給，栄養，水道・住宅・学校等の建設，医療／チャド，ソマリア，スーダン，バングラデシュ，タイ，フィリピン，ホンジュラス，ヨルダン等38ケ国

Médecins Sans Frontières

Médicins Sans Frontières —「国境なき医療団」は，1971年パリで創設された。医療関係者のみで構成された組織で，戦争，天災による被災者，恒常的に医療を欠いている地域住民に対する救援活動を目的としている。人種，宗教，思想のいかんにかかわらず,「ヒューマニズムに基づく医療倫理」を柱とし，東南アジア，アフガニスタン，アフリカ，中米などにわたり，資材，人材両面にわたる医療援助を行なっている。

MSF 創設の原動力となったのは，1968年ビアフラ危機時に国際赤十字で活動した医師達と，1970年西パキスタンの洪水被災者救援に立ち上った医師達である。当初は資金資材が充分でなく，既に第三世界で活動していた組織への人材供給源であったが，今日では，地方支部化，国際支部化を実現し，いくつかの姉妹団体と協力して，その機動力を増している。活動方針をめぐって内部的には意見の対立もあり，若い世代を中心として，新しい時代に対応する運動が模索されている。

具体的な活動については，次のウォルフガング・ジョンジュール氏のインタビューを読んでいただきたいが，MSFの援助活動で現在最も大きな比重を占めている部門は，医療後進地域に対する援助である。医療，予防，衛生教育，熱帯医学，僻地の病院援助など，長期的展望と周到な準備，調査が必要となる。MSF は独立した民間機関であるが，現在でも医療技術者の人材供給 — プール機関としての機能も失ってはいない。

パリに本部があり，そこにいる本部役員にも現場経験豊かな医療関係者が多い。財源は，基本として一般からの寄付と会費によっているが，MSFの独立性がそこなわれない限りで一般企業，政府公式筋，あるいは友交団体からの援助も受け付けており，これはマスメディアや広告宣伝会社等の無償協力に助けられるところが大きい。チーム派遣の際の経費は，短期の場合は交通費以外は無償，6ケ月を超える場合はその期間分だけ補償が支払われる。

発展途上国での医療の実践には，伝統風俗文化社会の違いがからみ，特殊な技術を要求される場合もある。このような観点から，派遣チームが効果的な医療を行なえるよう，出発前に短期間の技術講習を行なえる医療機関が各地に指定されており，MSF内部でも，豊かな経験に基づくマニュアルが出版されている。チーム派遣時に携行する薬品，手術検査器機などが規格化されているだけでなく，テントによる野戦病院建設の模擬訓練なども行なわれている。これらの経験，知識を生かし，MSF はパリ大学の「発展途上国特殊医療講座」の災害，緊急医療の授業を受け持っている。しかし，このような教育も現実の実践を支えるには，まだ不充分であるといわれている。

MSFのポスター
裏側は世界地図になっている。

インタビュー　MSF　タイ・ダイレクター

ウォルフガング・ジョンジュール氏

Q－緊急医療を主になさっているMSFでは，自然・人的災害のような事態が発生した場合，どのように対処されるのですか。

A－今までMSFも「試行錯誤」で，いろいろな対処方法を試みてきましたが，今は次のような方法におさまっています。まず，時間的な流れで見ますと最初に①被災地での調査があり，②その結果に基づく使命の施行があります。①では2人のメンバーが戦闘地域または被害のあった地域に出向き，出来るだけ速く情報を収集します。そして，その国の政府や各省，地方官庁とコンタクトをとり，正式な外部からの援助の依頼を得，その地域の医療関係団体や個人からの協力も約束してもらいます。いろいろな器材を運び込むのに必要な条件が揃っているかチェックするのも彼らの重要な仕事です。そして，この短期間に集めた情報をパリの本部に早急に報告し，結果を待ちます。

この調査団はベテランの医師達によって構成され，場合によってはこのチームが直ちに次の②使命の施行に移ることもあります。②の実際のプロジェクトには，短期と長期の活動がありますが，前者で気をつけないといけないのは人のローテーションをうまく組むこと。つまり緊急の場合は，それだけ精神的にも肉体的にも緊張して疲れるので，頻繁な人の交代が必要です。もちろんこれはパリ本部だけではなく，オランダ・ベルギー，ドイツ等にまで拡がっているMSF支部が，既に登録されている人材リストに連絡をとり，調整してくれます。原則として，このプロジェクト施行チームには，少なくとも内科医外科医そして，麻酔係が含まれていなければなりません。麻酔係は看護婦がしたり，内科医がすることもあります。長期のプロジェクトの場合も，少なくとも6ケ月ごとにはローテーションをしています。

Q－MSFの活動は，難民救援の他にどのようなケースがありますか。

A－大きく分けて5つに分かれます。

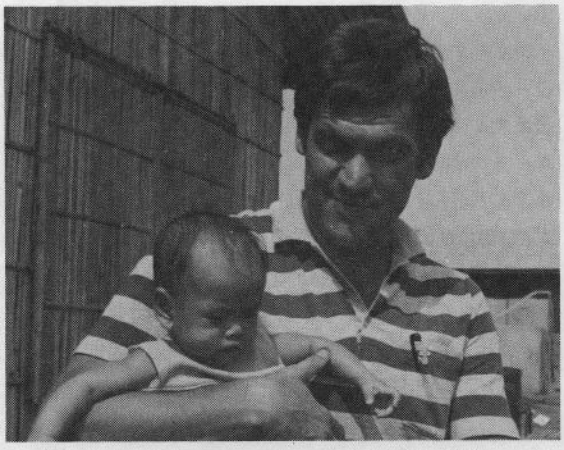
①戦争による被害者への対応

②難民キャンプ内での活動

③自然災害（地震・洪水etc）

④無医療地域における開発医療（予防医学）

⑤その他（国際機関や他のNGOへの医者派遣）



もちろん自国フランス内で，もし何かが起こった時にも出向きますし，隣国のイタリアの地震の時も人を送りました。

Q－MSFのタイでの活動内容は？

A－4つのチームに分かれています。カオイダン，バンナム・ヤオ，チェンカム，ドン・ラック難民村です。ドン・ラック以外は殆んどは長期医療プロジェクトで，緊急医療とは呼べません。合計で30名いますが皆，医者，看護婦，助産婦等の医療関係者です。私自身も外科医ですが，MSFのタイのプロジェクト責任者として毎月少なくとも2回は現場を回り，アドミニストレーションをしています。

Q－タイのプロジェクトで人が必要な時には，どのようにしてリクルートするのですか。

A－フランスに住んでいる元タイのソンクラ難民キャンプで働いていた医者夫婦が，ボランティアで人材調整をしてくれています。本部から出される広報誌にも募集が載りますし，緊急の場合は先程のように電話・電報・テレックス等を利用して参加の可能性を調べます。またASF（国境なき飛行団）は緊急時にはボランティアパイロットや飛行機を出してくれたりして，私達の重要なパートナーとなっています。

Q－今まで日本人と一緒に働いたことはありますか。

A－はい，79年にサケオにいたのでJMTのメンバーと何度か一緒に仕事をしました。英語が出来ないのは日本人だけではなく，MSFのフランス人ドクターも同じです。驚いたことに日本人とはドイツ語で話せたので，ドイツ人の私としては非常に嬉しかったです。ある時JMTの隣で分娩を手伝っていたのですが，どうも英語で云う〝Face Presentation〟，つまり顔が先に出てきてしまったので，JMTの産婦人科の医者を呼びに行ったのですが言葉が通じなく，

思い切って「ゲジヒトラーゲ！」(ドイツ語で同じ意)と叫ぶとすぐにわかってくれたのです。

Q－タイにこれから来るであろう医療関係者に何か伝えたい事はありますか。

A－まず熱帯医学を少しは知っておくことです。栄養学や産科もとても役に立ちます。高度な技術よりも臨機応変に対処出来る技術能力が必要です。Electro-Cardiograph（心臓運動計）が読めなくても，実際には必要ないのです。またタイでの難民救援の場合でいうと，対象者となる彼らの祖国の歴史と現在の情況を把握しておく事も大切です。そして難民だけでなく，その周りに住むタイ・コミュニティに対しても援助のバランスをとる事が必要です。

Q－日本について何か興味がおありですか。

A－はい，昔から小説や日本文化についてフランス語，ドイツ語に訳されているものは殆んど読んでいます。昔，ブンラク（文楽）というのを観たのですが，あの人形使いがだんだんと目に入らなくなり，あやつり人形が生きてくる……不思議ですね。

Q－日本では自ら働きながらもあくまでも陰の援助者として働く人の事をあの人形使い，つまり黒子によくたとえますよ。

A－それはとても哲学的な意味あいがありますね。MSFの活動も難民達にとって，そうあって欲しいと願います。私達の活動を紹介したMSFのNewsletterはフランス語なので英語に訳したりして，日本の方々にも知って頂きたいと思います。これも，「黒子」ですか？！（笑い）

MSFのニュース・レターより　'83 Feb.－Mar.

タイ・カンボジア国境上の難民村，ノンチャン。乾期に入り，ベトナム軍とクメールゲリラの間で軍事的緊張が高まっていたが，国際機関のメンバーがいるので，真昼間にベトナム軍が攻撃してくることはないだろうという確信の上に立って活動を続けていた。

1月31日朝6時。ベトナム軍，ノンチャン難民村攻撃。私達は8時に着いたが，3年来数十人のMFSのメンバーが，心の一部を預けてきたこのキャンプの破壊に，なす術もなく立ち合うことしかできなかった。

そして，難民達の仮の避難地で再び一時的な医療施設の建築が始まる。MSFのチームは，テントを張り，業務を組織し，群集を導くことの適正さにおいて評価されている。18日には250 km 北にあるキャンプに向けて，2万人のうち1万3000人の移動が始まった。

これからの情勢がどうなるのかは，私達にはわからない。ただ一つ確かなことは，「これらの人々は彼らのいる場所において援助を必要としている。」ということだ。いかなる状況になろうとも，私達MSFはテントを張り，組織し，再構築し続けるだろう。しかし，いつまで私達は，この馬鹿げた遊びを容認することができるだろうか。数万という人々を絶え間なく，支障なく，移動させることができるだろうか。東南アジアの難民問題が，済んでしまった問題ではないことを認めさせるのに，どのように叫ばねばならないのだろうか。

LES BLESSES
DE LA GUERRE DU TIGRAY

MSFのニュースレターの1ページ

世界の難民情報

1983 SEP.-OCT.

ホンジュラス・ミスキート族難民のための食糧配給
UNHCR 提供

●戦火と飢餓にさいなまれる中南米

中米地域の紛争による難民は，百万人の大台に乗ろうとしている。エルサルバドルでは4年越しの内戦を通じ，全人口の6分の1にあたる80万人が難民化しているといわれる。ホンジュラスにはニカラグアのミスキート族（インディオ）約3万人が避難した。メキシコ南部にはグァテマラのクーデターの後，村を焼かれた農村約10万人が殺到した。これらの人々は今，戦争の恐怖に加えて飢餓の恐怖に襲われている。

10月12日WFP（世界食糧計画）はホンジュラスとメキシコに対する難民救済のための緊急食糧援助約240万ドル相当を送ると発表した。エルサルバドルではUNHCRやカトリック教会を中心に，食糧，医薬品の補給が続けられているが，難民増大の現状にとても追いつけないという。（10月22日付毎日新聞他より）

●ジブチからエチオピアへの本国帰還

エチオピアからジブチに逃れていた難民の本国帰還再定住計画が進められていた。9月末に第一陣171名がアディガラに到着した。エチオピアの治安は徐々に回復しつつあり，UNHCRが仲に立ち，エチオピア，ジブチ両政府と協議して，6月から本国帰還計画が進められてきた。

帰国は，あくまで難民の自由意志による。約5300人が帰国を希望している。生まれ故郷に戻る自発的帰国は，難民問題の一番望ましい解決法だが，そういう状況はなかなか生まれない。

難民の本国帰還はこれまでにもジンバブエなどいくつかの例はある。しかし，今回のジブチ計画は，20年近くも紛争の絶え間がない「アフリカの角」で実施される初の帰還計画であり，さらに，これまでの帰還事業と違って，帰国後の生活再建に重点を置いた，綿密な計画である。今後の難民問題解決の試金石とも考えられるだけに，その成否には国際的関心が寄せられている。（10月26日付読売新聞より）

●イランへ入るアフガニスタン難民

パキスタン経由でイランに流れ込むアフガニスタン人は絶えないが，最近，パキスタンの政情不安でその数が急増した。イランはアフガニスタンと同じペルシャ語圏であり，積極的に難民を受け入れ，その費用もすべて自国で賄っている。

イランはソ連のアフガン侵攻でアフガニスタンとの国境を閉鎖しているため，難民はいったんパキスタンに出て，そこからイランに入るルートをとる。パキスタンとイラン南東部シスタン・バルチスタン州との間にある国境警備所。国境のパキスタン側では，アフガン難民がイランの入国許可が降りるのを待っている。アフガン難民は，安住の地を求めている。（10月24日付毎日新聞より）

●チャド

東チャドのアベシェ付近での最近の戦闘の間に，UNHCRの車数台と，本国帰還者のための救援物資が失なわれた。トラック2台，四輪駆動車および，700トン以上の食糧，毛布1,000枚，石けん20トンが略奪された。（UNHCR，REFUGEES 9月号より）

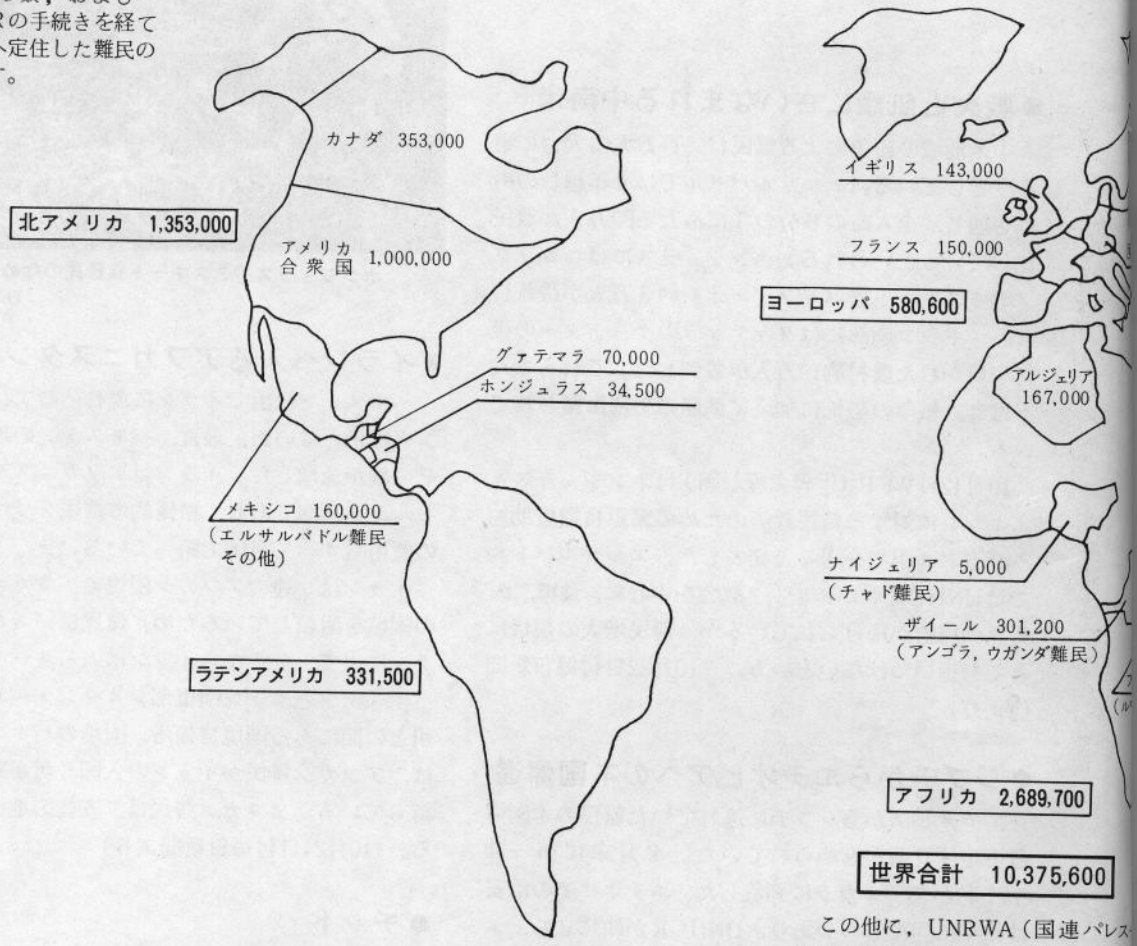
●レバノン

UNHCRは9月16日，国連機構によるレバノンでの人道的援助の一環として，難民を含むレバノンの被災民の緊急の必要に応ずるため，緊急基金から50万ドル（約1億円）を出すことを発表した。毛布・台所用具その他の救援物資は9月21日にレバノンのサイダ港に到着した。（UNHCR，REFUGEES 10月号より）

世界の難民地図

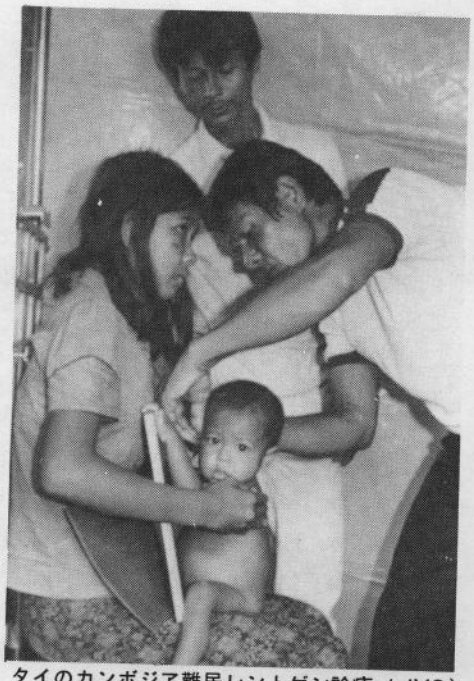
資料提供　UNHCR国連難民高等弁務官事務所
1982年12月31日現在

これらはUNHCR管轄の難民キャンプに滞在する難民の数，およびUNHCRの手続きを経て第三国へ定住した難民の数を示す。



この他に，UNRWA（国連パレス
難民救済事業機関）には約194万人
レスチナ難民が登録されている。

ホンジュラスのエルサルバドル難民母子保健活動


タイのカンボジア難民レントゲン診療（JVC）

パキスタンのアフガニスタン難民　子供のためのミルクの配給

CUSO

CUSOとは，Canadian University Services Overseasの略だが，現在は正式名としてもCUSOを用いている。また，ケベック等フランス語系カナダ地域やアフリカの発展途上国等では，仏語の略称でSUCOと呼ばれる。

1961年，ブリティッシュ・コロンビア，トロント，ケベックの三大学が連帯してCUSOを設立した。以来20年の間に，アフリカ，カリブ海周辺，ラテンアメリカ，アジア及び太平洋地域の40数ケ国に技術を有するボランティアを派遣し，カナダを代表する民間援助団体に成長した。地理，数学等の教師を派遣することから始まり，現在では教育全般と農，工，化等の技術分野を通じて，農村開発を主な活動分野としている。ボランティアの生活援助費が受益国の該当機関によって，その国の生活水準に従って支払われていることは，CUSOの特徴の1つと言えよう。資金は一般市民から募る一方，カナダ政府からODAの約6～7％を受けている。

CUSOの刊行物の表紙

インタビュー　聞きて　星野昌子

Q－CUSOの初期の頃のことを少し話して下さい。

A－20年前に3大学の学生達が立ち上って約2年間ほどは，殆どボランティアの自己資金と個人寄付で賄われ，人の募集も組織的には行われませんでした。その後，組織的活動の継続が困難なことを悟り，カナダの主だった銀行に寄付を依頼して資金を作りました。人材の獲得もカナダ大学協会を通じて行われるようになりました。

Q－CIDA（Canadian International Development Aid）との関係についてお話しいただけませんか。

A－CIDAはCUSOより遅れて設立された政府の援助機関ですが，そこではNGOの諸活動を検討し，適切有意義として選ばれたものに資金援助を行なっており，CUSOはCIDAから支援を受けた最初のNGOでもあります。

Q－CUSOの活動地域のうち，アジアそしてタイではどんな活動をしていますか。

A－世界の英語圏・仏語圏双方で言語の不自由なく仕事が出来るのがCUSO（SUCO）の利点で，最初はアフリカ，そしてラテンアメリカ，カリブ海地域へ拡がり，アジアはCUSOにとって比較的新しい活動地です。

タイでの活動は1965年に始まり，協力者を送り出すだけでなく，北部タイの農村開発や，そこで活動しているタイの団体に援助を行なっています。

（'81年4月，下のインタビューと同じ，トゥルコ氏に聞く）

CUSOタイ・ダイレクター
Mr. Paul Turcot

聞き手　深津高子

Q－タイにおけるあなたの今までの活動内容を，簡単に教えて下さい。

A－1974年から2年間，メカニック・エンジニアとして，タイのソンクラ大学に派遣され，教えました。カナダでは，大学在学中から職業訓練の場が学生に与えられていて，私はエンジニアの仕事を学びました。CUSOボランティアの後，再びカナダに帰り，エンジニアの修士課程を取って，またタイにきました。

その後，'79年から始まったカプチューン難民キャンプでのプロジェクトの展開や，スリン県での農村開発プロジェクトの構想に携わり，現在はCUSOのタイの責任者2人の内の1人です。主に，東北タイ・スリン県でのプロジェクトを担当しています。

Q－他に，CUSOはタイで今，何をしていますか。

A－大きく２つに分かれます。１つは，カナダ人を２年間，タイ政府から依頼のあった各地域に専門家として派遣するものです。もう１つは，タイ人を育てること。スリン県のプロジェクトがそうです。スリンでは，７つのタイNGOとコミュニティー開発省のみで，ワーカーは全部タイ人です。

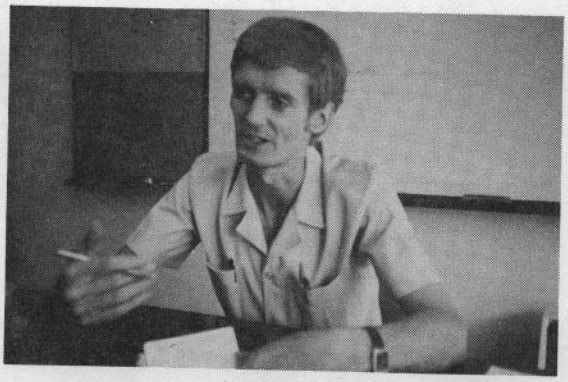
Q－ＣＵＳＯのタイでの活動は，難民救援からどのように移行していったのですか。

A－まず，カプチューンの難民キャンプの運営方針は，タイ人や難民の参加による救援であることが原則でした。このキャンプの企画，運営，実施の全てに，２つのタイの大学と12のタイのNGOが携わることで，人を派遣するより経済的に出来，それまであまり経験のなかったタイ人自身による救援活動の基盤をこの国で作り上げ，将来もしこのような事態が起こった場合にも，彼ら自身で対処できるようにしたわけです。このような流れで，スリン県の農村開発プロジェクトも始まったのです。この方針のもとカプチューンキャンプで働いていたタイ人ワーカーは，ほとんど次のスリン・プロジェクトに移行していきました。全体的傾向としてボランティアの数は減少傾向にあり，現地の入々の活動を支援する形での農村開発が主となりつつあります。

タイに行ってみたいというカナダ人はたくさんいますが，本当に渡航意図が明確でない限り，「その旅費を，ぜひタイ人のコミュニティーワーカーを育てる費用に寄付して下さい。その方が，もっとお金を有効に使えるでしょう」と言っています。タイ国内でもNGOの力はまだまだ弱く，ましてやNGOで働くボランティア達は，タイ政府からあまり認められていません。カプチューンキャンプの例が，タイ人の力を初めてタイ軍の最高指令部等に認めさせたケースだと思います。カプチューンで活動するタイ大学やNGOに資金援助を行っていましたが，ボランティアをキャンプに入れることはしていません。ボランティアは主として教育部門（英語，及び技術分野）に働き，生活費はタイ政府が支払っています。

Q－カナダでは人を採用する時，どのようなことに気をつけていますか。

A－まず，なぜ海外で救援，開発運動をしたいのかを，各人の頭の中で整理させるようにすることです。１ケ月半から４ケ月にわたるオリエンテーションをし，その間に，ボランティア候補者がグループに分かれ，自分の心理を話し合うのです。そうしている



トゥルコ氏，バンコクの事務所にて

うちに，自分はただ旅をしたかったのだ，とか，何からか逃避するために海外へ行くのだ，とか，自分の心が見えてくるわけです。この間に自分の真意に気づき，自ら断念する人もたくさんいます。

Q－日本にも海外でボランティア活動をしたい人がたくさんいますが，何かアドバイスはありますか。

A－知識を得るために本を読むのは簡単なことですが，自分を知ることがまず第１であり，それこそが一番難しいことです。先程も言ったように，なぜ行きたいか，例え逃避であっても，逃避だと知って行くのと知らずに行くのとでは，雲泥の差があります。また，よく海外に出て病気になる人がいますが，日頃から自分の体に気をつけておくことが大切です。

Q－最後に，あなたがこのような海外援助活動に関心を持ったわけを教えて下さい。

A－私は，カナダのケベック州にある小さな村で生まれ育ちました。私の兄弟は10人もいて，小さな頃から「分かち合い」，つまりどんな小さなものでも皆で分けるということが，生活環境の中で自然にはぐくまれていったのだと思います。外への関心は，アフリカ帰りの宣教師が，よく村でアフリカのスライドを見せてくれたり，小学校の教師に「自分の回りだけを見つめるのではなく，もっと広い視野を持ちなさい」と教えられたことにより培われたと思います。

Q－これからやりたいことは。

A－ケベック州の私の村で，タイのスライドを見せたり，話をしたりしたいと思います。「人々は，貧困や文盲を作り出すような社会構造の中に生まれるのであって，決して彼ら自身が他の人々より劣っているのではない」ということなどもね。また，私の両親にも，逆に自分たちの税金がどのように使われているのか見に，タイに来るべきだと，只今交渉中です。（笑い）

タイで働くボランティアに **インタビュー** ボランティアのボランティア観

Mr. マイク・メニング（I.R.C）

ききて　深津高子

Q－あなたのバックグラウンドを教えて下さい。

A－私は，アメリカ出身です。物理と化学を勉強しましたが，土木の仕事も並行してやっていました。大学を出てすぐに，平和部隊に参加しました。

最初はチュニジアに井戸掘りで14ケ月，次にソロモン諸島に給水の仕事で9ケ月いました。

タイには'81年の5月からいますが，今までにウボン・サケオ・カオイダンで給水，公衆衛生，トイレ建設等のコーディネーターをやってきました。

現在は，カオイダンでの公衆衛生のプログラムの一つ環境衛生にチーム約500人を組織して携わっています。

Q－その中で特に印象的なエピソードはありますか。

A－はい。まず民族によって水に対して独特のとらえ方があること。外国人がポンと村に入って井戸掘りをしても，その文化を理解していなかったため失敗したことがあります。

例えば，チュニジアの村で私は新しくセメントを入れるために，井戸の水を全部汲み上げたのです。しかし井戸を涸らすということは，村人達には人殺し同様の悪事をしたことになりました。いくらきれいな飲み水が得られても，村人達が飲もうとしなければ，プロジェクトは失敗です。

Q－チュニジアの後のソロモン諸島では？

A－チュニジアでの失敗をいかし，水に対する考え方，文化等を時間をかけて話し合いました。

その結果，作業自体も村人達だけでスムーズにいき，また管理も彼ら自身でやるようになりました。

Q－ソロモン諸島で一番嬉しかったことは？

A－ある日，修理方法の説明をしていたら，村人達が口々に「汚れた体のままで水に入っちゃ駄目だね」と言い，自分達の水は自分達できれいにしなければならない，と考えていることがわかり，準備に時間をかけてよかったな，と思いました。

Q－ソロモン諸島でのプロジェクトに対する自己評価は，いかがですか？

A－きれいな水が飲めるようになり評価していますが，ソロモンでは女性はそれまで，風習により下流でしか水を汲めず，そのため2時間もかけて，毎日水汲みに行っていたのです。しかし，この給水プロジェクトの結果，近くで水が得られるようになり，他の事に時間を使えるようにもなりました。

Q－これから海外に出てくる技術者たちに対して，あなたの体験から何かアドバイスはありますか。

A－そうですね。まず，精神的な面では，自分自身をよく理解していて，落ち着いていること，そして対象者を理解するための努力を惜しまないこと。

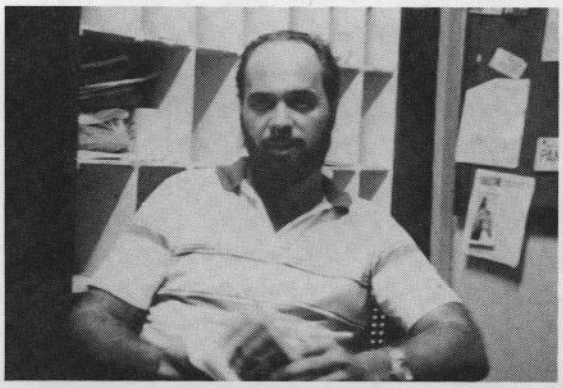
給水に関しては，大量の汚ない水を与えるより，少量でもきれいな水を供給する事の方が，長い目で見ると大切だということ。また，ある所でいくら掘っても水が出ない時は，あきらめてすぐ場所を移すこと。村人とのコミュニケーションも，もちろん大切ですが，その土地や国の公的機関とも連絡し合い協力関係を作っておくべきです。

Q－最後に，このような海外での援助活動の源になっているものは，あなたの場合何ですか？

A－自分のためと，他人のため，両方の気持ちがあります。つまり，困っている人に手を差しのべたいという気持ちはありますが，それと同時にこの地球上をもっと見たい，知りたい，という気持ちもあります。

Q－このような活動をこれからも続けていきますか。

A－もちろんです。一生やりたいと思います。



メニング氏，バンコクの事務所にて

ダニエル・ミュラーさん

ききて　嶋　紀晶

Q－出身地と所属団体，仕事を教えて下さい。

A－スイス人です。27才。1983年1月よりOHIで働いています。始めは，カオイダンで看護婦，プロジェクトの運営に関っていましたが，1ケ月半前より国境のノンプル・タプリック難民村で働いています。

Q－以前は何をしていましたか。

A－スイスで病院の看護婦をしていましたが，1981年よりICRC（赤十字国際委員会）に入り，タイで'82年8月まで働いて一時帰国し，また来ました。

Q－何故，この分野の仕事がしたかったのですか。

A－海外で働くことに魅力を感じました。母は大変心配して，私がスイスで働くことを望みましたけれど。

Q－今後もこのような仕事を続けていくのですか。

A－はい。契約がきれたらICRCに戻って，アフリカに行きたいと思っています。できれば産科の勉強もやり直したいので，どうなるかわかりませんが。

Q－どんな時に満足や，やりがいを感じますか。

A－一生懸命働く人達の姿や，懸命に義足で歩く練習をしている人の姿を見たりした時です。

Q－彼らとどのように仕事をしていますか。

A－彼らが自立できるように，その精神を失わないように，こちらが与え過ぎたりしないようにしなければなりません。

Q－今までに緊急状態で働かれたことはありますか。

A－ICRCにいた時です。緊急時の医療では，私達の能力の限界の中で努力します。まず，熱くならないことが大切です。能力の限界というのは，患者の数に対する私たちの許容力の問題ですから，そういう時は，患者を3つのグループに分けます。まず，緊急の医療が必要でないもの，それから必要なものそして必要ではあるがその治療に時間がかかったり，治療しても回復の望みが薄いもの，というようにその場の状況に応じて患者を選びます。その判断をするのは経験を積んだ人で私にはできません。

Q－現場で働きたい人達に何かアドバイスを。

A－現在，将来をしっかり見すえることです。そして，彼らを理解し，自分の国を持ち込み過ぎないように，文化や習慣の違いをふまえた上でやっていかなければならないと思います。

Q－日本人と一緒に働いたことがありますか。

A－以前JMT（日本政府派遣医療団）が活動していた頃一緒に働きましたが，彼らはいつも微笑んでいて，私の言うことがわかっているのかいないのかわからないことがありました。やはり，言葉の問題が大きかったですね。

Q－OHIにはどのようにして参加できますか。

A－現在OHI（私達）が必要としているのは物理療法の出来る人です。もちろん，技術者，看護婦，医師，コーディネーター等，不可欠です。国籍は問われません。

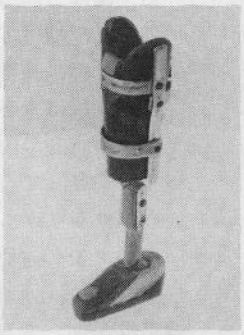
Q－クメールの人達について何か？

A－クメールが平和になり，彼らが祖国へ戻れるようになり，戻ってほしいと思います。

ミュラーさん，カオイダンにて

OHI（Operation Handicap International）

フランスの団体，カオイダンキャンプ，国境の難民村，およびカンボジア国内で，地雷や銃創のために手足を切断した人々の義手義足の制作および機能回復訓練を行っている。人々の自助自立をめざして，材料は地元で手に入る木や皮などを用い，平行して技術者・セラピストの訓練も行なう。OHIは，'80年以来タイで活動していたSOS/ESFから別れて'82年8月に独立した。



OHIが来訪者にプレゼントしている義足のミニチュア（約8cm）

ソマリアからのインタビュー

ききて　柴田久史

今回，ＪＶＣソマリアの農業プロジェクトに灌漑技術専門家として参加してくれることになったスリランカ人のアリヤラトネさんにインタビューした。

彼は，1979年から81年までの2年間，タンザニアでＵＮＶ（United Nations Volunteer：国際連合ボランティア）として，地域開発給水計画に従事，1981年から83年の2年間は，ソマリアで難民を対象とした農業計画に，それぞれ参加している。

アフリカでボランティア活動4年という豊富な経験を持った彼に，その体験談を語ってもらった。

Q　まず最初に，ボランティアとして国外で働いてみようと思ったきっかけは？

A　私の学んだ灌漑技術を国際的に生かしてみたかったことと，外国で異なった技術を学ぶことによって，自分の技術レベルをもっと向上させたかったこと。また，私は外国で働いて世界中の人達と友人になったり，異なった文化や言葉を学ぶことに興味があったからです。

Q　どうしてアフリカを選んだのですか？

A　子どもの頃，「ハタリ」の映画を見て，アフリカが好きになったからです。

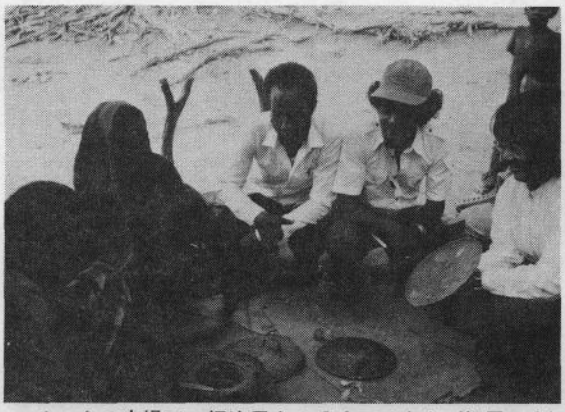
Q　最初にＵＮボランティアとして参加したタンザニアのプロジェクトについて説明して下さい。

A　ＩＬＯ（International Labor Organization：国際労働機関）による計画で，タンザニアのルクワ地区の２つの村（人口各約３万人，２万人）は，高地に位置しており，雨も降らないので住民は水を得ることができません。そこで，７キロ先の山の中腹にある湖より，水路とパイプを使ってこの村まで水を引いてこようというプロジェクトでした。

私は，その水路とパイプを建設する専門家として参加しました。他には首都ダルエスサラームに調整員１人，アドバイザーが１人の計３人です。

Q　現場にはたった１人ですか？

A　そうです。あとは現地の人を雇ったり，村人の協力を得て仕事をしました。今まで水のなかった村に水を引こうという，現地の人にとっては非常に有益な計画で，私を大歓迎してくれました。彼らはとても協力的であったし，この計画により５万人もの村人の生活が助けられるので，苦労したというよりやりがいを感じ，たいへん充実した日々を過ごすことができました。



ルークの市場で，鍛治屋をのぞくアリさん（帽子の人）

Q　お互いの意思の伝達などの，問題は？

A　英語を話す現地の人を雇って通訳してもらい半年もたつと私もスワヒリ語をカタコトで話せるようになり，会話で困ったという実感はありません。

Q　何か印象的なエピソードはありますか？たとえば恐い目にあったとか……

現場では，毒ヘビなんかが時々でますが，日本だって交通事故とかガンとか，危険なものがたくさんあるでしょう。それと同じように，現場に住めばそれは生活の一部です……

アッ，１回だけ少々恐い思いをしました。首都から現場の村まで1300㎞あり，車で３日かけて行くのですが……

Q　エッ，1300㎞ですか。（これは日本の全長の約３分の１にあたり，その距離のすごさに思わず声をあげてしまった）

A　そうです。ある日，首都から現場へ行く途中，夕方になって車が国立公園を通過中に故障してしまい，日は暮れるし，近くの村までは約50㎞もあるし，その上車の周りには，ライオンやヒョウが現われ，不安な一夜を過ごしたんです。食糧は持っていたのですが，水がなかったのでしかたなく車のラジエーターの水を飲んでノドの渇きをいやしました。

彼はこのプロジェクトを成功させて，２年の任期を終え，次にソマリアの難民キャンプへ，農場を開くために，灌漑専門家として派遣された。

Q　次にソマリアについてお聞きしたいのですが，1981年当時のソマリアの状況はどうでしたか？

A　難民キャンプでは，飢餓やマラリア，下痢などの数々の病気が蔓延し，たくさんの子供達が死んでいき，最悪の状態でした。

世界各国からボランティア団体がやってきて食糧配給，医療，保健，給水，農業活動などを始めました。

Q　当時，ボランティア達の最大の問題はなんでしたか？

A　いかにして，首都モガディシュから難民キャンプまで行き，必要な物資を現場まで運ぶか，ということでした。今のように道路が整備されておらず，雨期になると道路が流されてしまったり，車が泥にはまって動けなくなってしまったり……

たとえば，自分の車はなんとかぬかるみから抜け出すことができても，前に食糧を運ぶトラックがぬかるみで動けなくなっていると，後ろで待っていなければなりません。

現在では，モガディシュからゲドー，ルーク地区の難民キャンプまでの400㎞を，車で8時間から10時間で行けますが，当時は2日から3日もかかりました。

各地で活動するボランティア団体が集まってミーティングを開くのですが，みんなUNHCRのヘリコプターでやってきました。ミーティングの議題も，道路が遮断されたときの緊急事態に，どのように対処するかというのが主なものでした。モガディシュから出るUNHCRの小型飛行機も，キャンプ近くの滑走路がぬかるんでいると，着陸をあきらめてそのまま帰ってしまうこともしばしばありました。

（注）現在では，モガディシュからルーク地区の道路は，3分の2ほど舗装されており，ぬかるみにはまる心配はほとんどない。UNHCRの小型飛行機の定期便も週2便ある。

Q　今までをふりかえって，ボランティアをしてどんなことが良かったと思いますか？

A　その国の人達や，世界中からやってきたボランティア仲間と友人になれるし，私の活動が，現地の人達にとって役に立てたとき，彼らが非常に喜んでくれたときに，満足感を感じます。

また，異なった文化，習慣，言葉にふれ，それを学ぶことができました。

Q　最後に，これから海外でボランティア活動をしたいと思っている，日本の人達になにかアドバイスをお願いします。

A　いっしょうけんめい勉強して，現地のことを知り，現場へ飛び込み，最低1年か2年かかれば，その国を知ることができ，非常に有意義な本当のボランティア活動ができると思います。

ソマリアは，年々事態が改善され緊急事態は脱したというものの，彼らが自立するまでにはまだたくさんやることがあります。日本のボランティアの参加を期待しています。

タイプライターに向うアリさん

彼は非常に行動的で，どこへでも積極的に出向き友人をつくる。自分で料理したり，パーティを企画して大勢の友人を招いたり，気づいたことはパッパッと行動に移す。精神的にも肉体的にもタフで，「I don't care」「Don't mind」（心配ないよ！）といって，どんな問題にも楽天的に取り組んでいる。私にとっては非常にたのもしく，強力なパートナーである。

アフリカでのこういった活動では，その活動に入る前の準備がいかにむずかしいかを思いしらされた。いかにして現場までいくか，どうやって必要な物資を現場まで運ぶか，私は，モガディシュから難民キャンプの400㎞が非常に遠く感じられたのだが，彼の話を聞くうちに，序の口の段階であることを痛感させられた。今回のインタビューを通して，アフリカの広大さ，ボランティアとしての心構え，魅力をかいま見たような気がする。そして，アフリカ各地で苦しんでいる数百万人の難民。JVCがこれから何をし，何をすべきか，何ができるか，改めて考えさせられるような，彼の一言一言であった。

私の出会った外国人ボランティア

熊岡路矢

一口に海外ボランティアといっても，専門をもち職業として救援活動に携わっている人々から，旅の途中で「少し役に立ってみようか」という人まで様々である。また動機の方も福祉や宗教に根ざす場合から，冒険心や好奇心あるいは自国からの逃避的傾向まで一人の心の中で複雑にからみあっている。そんな中で印象的であった何人かのボランティアについて書いてみたい。

●トゥー（ベトナム系ニュージーランド人。カウンセラー） トゥーの一家は75年の革命以前にベトナムからニュージーランドへ移民した。姉を頼ってやってきたシンガポールに，多くのボートピープルが到着したことで，米国大使館の面接やUNHCRのしごとを手伝うようになった。ベトナム語で理解してもらえるために，難民側のやっかいな相談や微妙な問題はどっと彼女の所に持ち込まれる。彼女自身は難民の境遇になった事はないが，精力的に働き，同胞のため定住や家族再統合に関わる多くの難問を解決している。家庭内トラブル，情緒不安定のケースなどもしばしば持ち込まれる。

昼食時には緊張した精神の反動のためか，機関銃のように冗談がとびだし，いつまでも食事の終わらない彼女である。（活動地＝シンガポール国連キャンプ）

CCSDPT 提供

●ネスタ（英国人。看護婦・カウンセラー） 主婦として3人の子供を育てながら，キャンプ内の病人，心身障害者，保護者のいない年少者を担当したネスタは，同時に10名以上の主婦ボランティア（国籍は様々）のまとめ役でもあった。経験をつんだ福祉活動家として難民と自立に関して深い見識をもち，カウンセリングを通じてともすれば希望を見失いがちな人々を暖かく励まし続けた。また新入ボランティアに対しては，難民流出の構造から救援の論理，具体的な注意事項（例えば，ベトナム人社会では女性が男性に命令する形は避ける，面子を非常に重んじる，表向きには否定的表現＝ノーが出てきにくいなど）をオリエンテーションしてくれた。

クリスマスや新年には，ベトナム人自治会の開く祭りに家族ぐるみで参加し，リラックスした彼女の特長あるカーリーヘアと幸福そうな笑顔を思い出す。またそのようにして3人の子供達もごく自然に母親の果している社会的責任を理解すると共に，異なる文化や社会の問題に触れていくのであろう。（活動地＝シンガポール国連キャンプ）

●ムック（タイ人。ノルウェーの民間団体REDD BARNA所属） 細身であるが活力に満ちたムッ

WORLD VISION
VSO
Save the Children
OXFAM
RESCUE
A Non Profit Voluntary Agency

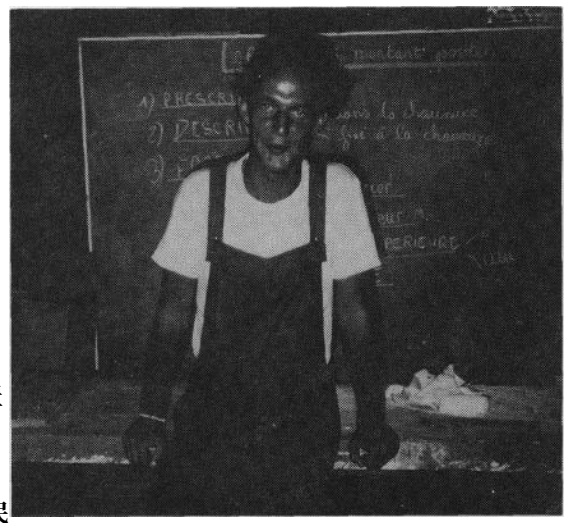
クは，あの広いカオイダン収容所の中を車で巡りながら，カンボジア難民の裡でもより弱いグループの人々ー寡婦，母子家庭，障害者，保護者のない老人・年少者を訪ね歩く。他の団体とも協力して，たとえば技能訓練を通じて障害者の社会復帰を進めたり，一人暮しの老人やこどもに一時保護を提供する家庭を探し出したり，多様な活動に従事している。小さい頃から家庭内のしごとや責任を負って働くタイの女性は，社会に出てからも各々の分野で責任者としてばりばり働いている例が多い。ムックもそんな一人として，カオイダンのむずかしい福祉部門の一画をしっかりと支えている。（活動地＝タイ国内カオイダソキャンプ）

●ルーカス（スイス人。伝統医療）1979年タイにやってきたルーカスは，はじめICRC（国際赤十字）のコーディネーターとして，タイ-カンボジア国境の村やキャンプで難民救援活動に加わった。80年半ば緊急状態が一段落してからは，カンプットキャンプで伝統医療事業を始めた。カンボジア人で心得のある人物を探し出し，漢方薬を中心とする薬剤室をもつ診療所を始めた。東南アジアの農村部では西洋医薬より，まじないも含む伝統的な治療法がはるかに重用されている。

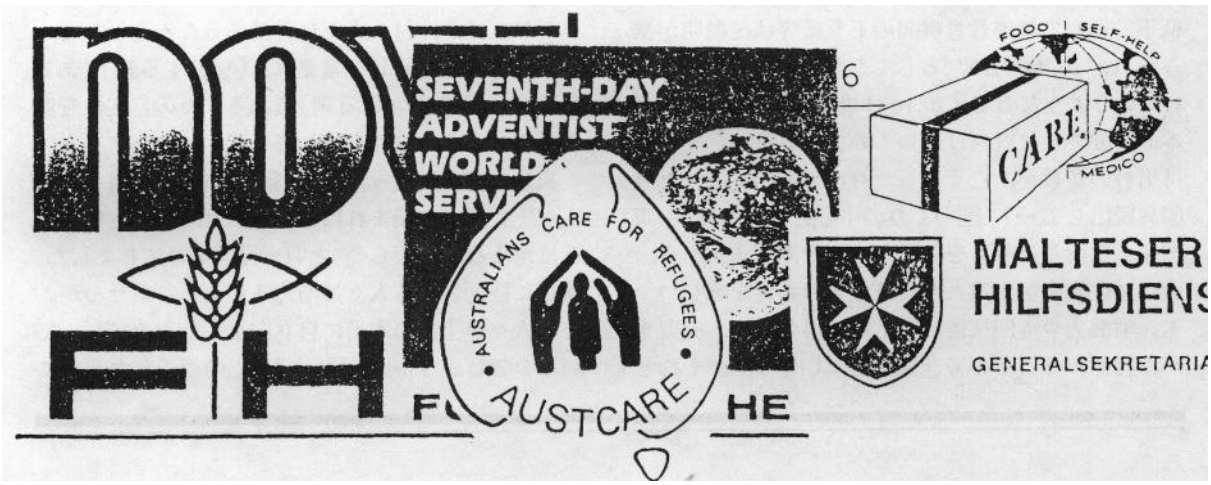
「同じ人間として地球に生まれながら，片や豊かな生活や教育をあたり前のものとして楽しめ，片や小学校もそこそこに過酷な労働に飛込まねばならないこの世界は大いに不公平ではないか。生まれという偶然による差で多くを恵まれた自分は何らかの形で逆境にある人達に返したい。」とルーカスは言う。豊かで近代的で冷たい自国より，あたたかい心のタイを選ぶ，と語っていた彼も，今は充電と準備の時をスイスで送っている。（活動地＝タイ農村および難民キャンプ）

●ミシェル（フランス人。義肢製作者，リハビリ訓練士）　フランスの団体で義手義足を作る訓練をうけた彼は，カオイダンに派遣され，地雷・銃創により手足を失った人々のリハビリテーションにつとめた。国境周辺にばらまかれた小型地雷のため，被害者は子供を含む一般農民に及んでいる。団体の方針により，義肢は竹・木・皮のような現地で手に入れやすい素材を利用して作る。その人がカンボジアの田舎に帰ってからも修理に困らないようにするためである。

ミシェルは今，同じ団体のプノンペン派遣員と交代してカンボジアで働いている。こちらでは患者は圧倒的に兵士が多い。切断箇所や足の太さにより，一人一人にぴったりのものを作っていく。膝が残されているか否かでリハビリは決定的に異なるそうだ。無口な（特に英語で）彼から多くを聞き出し得なかったが，これからもアジアやアフリカ地域で働きつづけたいとの事だった。



ミシェル，プノンペンにて



声

本誌読者の一人として　金子哲也

今，世界には，約1000万もの人々が，難民という状況下での生活を余儀なくされている，と聞きます。JVCが推めるような様々な活動が，ますます必要とされなければならない，と言えましょう。しかし，“平和”な日本にごく普通に暮す私たちは，一体何をしたらよいのでしょうか。何をしなければならないと言えるのでしょうか。JVCに連なって，これらの人々とともに，これからの平和な社会を築いて行きたい。そのように思う読者の一人として，JVCに望むこと，または一人ひとりのボランティア，読者（私自身）に求められるのではと思われる視点など，近刊の本誌面への考察を中心に，綴らせて頂きたいと思います。

まず，本誌26号『カンボジア訪問』について。3ページ左段4行目に“基本的必要”という言葉が見られます。その一文は「…もともと自然の豊かな土地で，自給自足的な農村協同体で生活を続けてきた人々だけに，健康と農業と基礎教育に関する基本的必要が満たされれば，平和で人間的な生活は最低保障されるであろう。」（傍点筆者）です。この“基本的必要”とは何を意味するのでしょうか。

報告文全体より，きれいな飲み水の入手困難，公衆衛生観念の欠如，医療機関施設の絶体的不足，また水利＝灌漑施設の不良，グラフから籾米生産量の低下，そして基礎教育機関の不整備等状況説明が試みられ，“基本的必要”としてこれらの充実が述べられているようなのですが，一体誰れが，これらを“基本的必要”と位置付けているのでしょうか。文中に「男性の多数が，亡くなったり行方不明になったり国外脱出して…」「国づくりの中心となる知識人，専門家，技術者の多くを欠いた…」とありますから，そこに住み生活する人々自身がその必要を感じつつも，労働力や専門技能の不足不修得のため，充実すべく行動することができないのでしょうか。それとも，報告者を案内したであろう政府担当官の発言なのでしょうか。または，報告者自身の感想なのでしょうか。この誰れがに相当する部分は，ついに報告文には見あたりません。

住民自身の要求であるのか，政府の要求であるのか，はたまた「援助する側」が仮設した要求であるのか。この相違は，援助がそこに住み生活する人々の自立向上を促す本物となるか，単に国家経済の成長を促進しアジア的貧困（所得格差の拡大）を助長するものとなるか，援助者の自己満足で終わるか，という援助行為そのものの正否を握っていると言っても過言ではないでしょう。

報告者はこの国の人々を「もともと自然の豊かな土地で，自給自足な農村共同体で生活を続けてきた人人…」と語っています。そこに住み生活する人々自身が必要を意識し，満たすべく努力する時，初めて破壊された生活・社会が復興するのではないでしょうか。そして，その行動に連なることのみが援助だと言えるでしょう。その上で「平和で人間的な生活が最低保障」されて行くのだと思うのです。

本誌28号『タイ農村の給水プロジェクト』報告文においては，この言わば「援助する側」の見方と「援助される側」の見方が並行して見られます。報告文右段に「…よそ者としてできることに限りがあります。村のことは，村の人々の力で良くしていかねばなりません。」（傍点筆者）とあります。同時にこの報告文の副題らしい言葉は「“村人の協力が肝心です”」なのです。一見同じ論調にも思えます。「私たちは援助します。でも本当は村の人々がしなければいけないこと。だから協力して下さい。」協力するのは私たちではないのでしょうか。「村のことは，村の人々の力で」とは明らかに，このプロジェクトの主体が，村の人々自身であることを示しています。この副題らしい言葉は，「援助する側」である私たちが，「援助される側」である人々の自主性を無視してしまう危険性を示しています。

東京事務所に伺った際，「資金と（技術を持った）人が（JVCに）集まれば集まるだけ，援助される人々は増えるのだから…」という発言を耳にしました。確かに援助される人々は増えるかもしれませんが，その人々の生活が本当に自立向上したものになっているのでしょうか。「援助する側」の仮設した要求に

基づくプロジェクトの推進は，かえってそこに住み生活する人々の自立を奪う結果にならないでしょうか。問題なのは，その資金と技術をもつ人間（私たち自身）が，いかに「援助される側」の人々とともに共通の課題認識を持ち，同時にともに行動できるか，ということではないのでしょうか。

昨年10月のことですが，総理府が「インドシナ難民に関する世論調査」の結果を発表しています。それによると，約８割もの人々が関心を持ち援助すべきと答えていますが，実際にその心情を行動に表わそうとする人は１割にも満たない，というものでした。“平和”な日本に住む私たちにとって，難民という状況にある，または開発途上国に住む人々とともに，共通の課題認識を持とうとすることは至難のことと言えるではないでしょうか。そして，援助すべきと答えるその内実は，結局「援助される側」の人々の自立を奪う結果にならないでしょうか。

ＪＶＣに望むことは，この「援助する側」にある私たちと「援助される側」にある人々の関連をより明確にして頂きたいということ。ともに共通の課題認識を持ち，同時にともに行動できるよう考察して頂きたいと思います。何故援助するのか，または行動をともにしようと思うのか。その行為は一体何を意味するのか。このような疑問を絶えず内包して私たちに示して頂きたいと切望します。

現地で活動するボランティアの方々は，「援助される側」の人々に直面し，まさに膚でこの関連を実感されていると思います。「援助する側」である自らとの矛盾や葛藤があるのではありませんか。“平和”な日本の生活への疑問があるのではありませんか。本誌読者の一人として，現地で活動する者としての本音を報告して頂きたいと思います。本誌の諸報告文は，その活動推進上の専門的報告や言わば美談が多過ぎるように思われています。

最後に，本誌29号４ページ，柴田久史さんの報告文は，「援助される側」に立脚すべく自らの「援助する側」としての矛盾問題を提起した，読み応えある報告でした。読者の一人として，このような姿勢，行動に連なってまいりたいと思っています。

（JVC 活動経験者）

寄付・寄贈して下さった方々の御氏名を掲載させていただきます。（敬称略，順不同）

★バンコク事務所

〔４月〕　杉山正明，田原勝幸，山本幸史，百村清，久楽一元他７名，Richard Chevalier，加藤勉，嶋紀晶，小田中勝己，日大交通土木工学科構造第１研究室＋YCU，谷沢一江，Vietnamese People，安孫子芳樹，磯村美智子，後藤生光，碇尚，山形新聞社，菊地幹也他５名，福井県エトワールプラザ，深津高子，福村州馬，藤井和泰

★東京事務所

〔４月〕　小川裕，広沢衆子，井崎正子，相田俊一，山口寿則，神戸キリスト教青年会，高橋光明，上岡由紀子，手塚米子，松本修，今井記代，渡辺聖子，浅川富二，山辺中学校ボランティア委員会，塩見良子，御殿場コロニー互助会，戸田喬丈，藤城順一，神山千枝子，杉山真理子，山崎明美，小泉徹，手塚典子，六鹿日出美，鈴木繁，藤橋和光，足立啓，白石恵，田中秀之，河田由美子，伊藤清子，松本幸子，稲垣三千穂

〔５月〕　田中美智子，並河由美子，加島敏蔵，井崎正子，信江慶子，大谷範子，進来廉，山口寿則，小沢靖子，上岡作太郎，上岡由紀子，国府千嘉子，御殿場コロニー互助会，石田亀吉，真仁田勇二，経営情報サービス，春日井市／中村，藤橋和光，大阪ブロック協議会国際問題委員会一同，安藤幸子，鈴木由美子，宮原千佳，川上吉康，篠原瑞枝，石垣キエ子，田中秀之，高橋，水野エイ子，稲垣三千穂，田中優子，

〔６月〕　上岡由紀子，ヤマ美容室，田中美智子，事後活動推進連絡協議会，井崎正子，茅原吉人，中村義邦，山口寿則，斉藤裕子，京都ＹＭＣＡ，世界救世教福岡県本部，広沢衆子，加島敏蔵，興津暁子，谷村吉則，篠原秀郷，林ユリ子，御殿場コロニー互助会，半澤貴子，田中秀之，武田長久，岩本伊都子，藤橋和光，戴清美，稲垣三千穂

JVCプロジェクト

1983年11月5日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カオイダン（カンボジア難民キャンプ）	**自動車整備学校** 自転車，牛車，モーターバイク，自動車，発電機の整備技術を習得する。 9月21日に計273名の生徒がコースを終え，269名が中間試験に合格し実施コースへ進級した。 9月23日にあらたにコースを開始した（406名）	UNHCR ロータリー近畿 全国社会福祉協議会	嶋　紀晶※，松本　一仁 トンディ，ソムエック 稲垣三千穂
タイ・カンボジア国境	**レントゲン移動診療プロジェクト** 移動レントゲン車による，難民村およびタイ被災村の病院への巡回レントゲン診療。 タイ赤十字共にアランヤプラテート南のタイ農村の巡回を始めた。外科診料におけるＩＣＲＣ，（赤十字国際委員会）と医療機関との協力は順調に進んでいる。	日本青年会議所 関東地区，医療部会 西本願寺 結城青年会議所 城西病院 W.F.P./UNBRO	金子　一弘※，林　達夫 武田　長久， スラ・プロチョン サルミエント・ロドリゴ クリアンクライ
	ナムコン難民村・補助食供給プロジェクト 新しく難民村近くに作った補助食供給センターで9月14日登録を行い，15日から給食を始めた。出席率は依然低く，原因解明のためのミーティングを難民村のリーダーと行った。9月下旬からキャンプ周辺の軍事的緊張が高まり，安全性の問題のため，WFP/UNBROの指示により10月　日から元の場所にもどった。(プロジェクトの継続について検討中)	W.F.P. UNBRO	大野　直樹※，イサラサック トンチャイ，近藤美佐子 ヤワラーク，スティブン
タイ農村	**給水プロジェクト** 東北タイ農村での井戸掘り，貯水タンクづくり ノンパイ・ドンライファイの深井戸完成。アンパー（タプラヤの役所）裏のため池拡張工事終了。 チャンタブリ県・トラート県の3ケ村調査。 8月6日〜9月15日，スラポン，木村が日本でのキャンペーンを行った。	モラロジー国際救援運動推進委（MIRC） NTV時間 チャリティー	木村　信夫※，スラポン 諸見里　勝
タケオ（カンボジア国内）	**井戸掘り** 地域の診療所での井戸掘り	OXFAM モラロジーMIRC	簑田　健一（待機中）
パナニコム（第三国定住待ちの難民の一時収容施設）	**日本語学校** 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエンテーション トランジットセンターでの難民の動きが速く，カオイダンから来る難民のうち，アメリカへの受入れが決まっている者は，すぐにフィリピンとインドネシアのプロセシングセンターに向けて出国している。 母国語と外国語の読み書きの能力・学歴・職歴の調査票を生徒に配った。またJVCスタッフと難民のワーカーとのミーティングを毎週行うことにした。 9月27日，28日，日本政府の調査団が面接を行った。	天理教千葉 千葉県	佐藤　和美※，ティアン 鈴木絵里子，石丸　寧 森本　陽子，森山久寿子

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
クロントイ・スラム （バンコク市内のスラム）	**電気工養成所**　スラム住民のための職業訓練 **電気工研修所**　養成所終了者による電気修理 **奨学金援助**　スラム児童のための学費援助 1983年度分援助児童合計94名(小学生81，中学生12，成人（身体障害者）1)。1984年4月からの援助のための面接調査実施。 **図書館**　子供たち，大人のための図書館 6月末日現在，蔵書1,464冊，会員935名。 第9区のクリニックに週2回，医療状況，住民の健康，栄養状態を知るために，釘村が看護婦ボランティアとして出向している。(釘村9月7日～26日スリランカで暴動による被災者の調査)	モラロジーMIRC 神奈川県国際交流協会 一般寄付 NTVチャリティー ACT 庭野平和財団 JOFIC	福村　州馬，釘村千夜子 イム，サムルアイ 坂場由美子，タウイチャイ 伊藤真理子
ソマリア （東アフリカ）	**農業プロジェクト** マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソマリア難民に対する農業による自立促進プロジェクト。	UNHCR 一般寄付	柴田　久史，アリヤラトネ 税田　芳三， 山賀　望幸
レバノン （中近東）	**救援物資送付プログラム** 内戦による被災民（レバノン，パレスチナ人）を対象に，現地援助機関を通じて，毛布，医療器材，乳児用紙おむつ，粉ミルク等を配布。10月28日に第一次空輸を実現。第二次輸送を11月下旬に予定している。	一般寄付 （輸送協力） 日本航空・ エールフランス	竹内　俊之
東京事務所 （本部）	渉外，資金調達，ボランティア調整 会計，総務，情報収集および広報，T/E発行	全社協，YMCA 妙心寺 一般寄付 神奈川県 東京都社会福祉協議会	岩崎　駿介（代表） 星野　昌子（事務局長） 熊岡　路矢，田島　誠， 荻野美智子，本橋　栄， 鴇田　三芳，他約20名
バンコク事務所	渉外，資金調達，ボランティア調整， 会計，総務，情報収集および広報		高塚政生(バンコク事務所長) 深津　高子，山西　映子 ポンピモン，カモン 森本喜久男，佐藤　正喜 小池　清治，他約10名
京都連絡事務所	渉外，ボランティア調整，募金，会計， 情報収集及び広報	支持会費 バザー売上	永井　聖子（京都事務所長）他数名

●「難民問題研究グループ」初の研究会開く

10月20日，「難民問題研究グループ」が結成され，第1回研究会が開かれた。この研究グループは，国際関係・国際法・開発問題など各分野の研究者，弁護士ら約20名からなり，代表者はおって決定されることになっている。

難民問題は，量的に増大し質的に変容しており，難民の保護と救援の活動は多くの課題に直面している。わが国においては，難民問題の科学的研究に立ち遅れの感があったが，この研究グループは，難民問題への対応についての実質的な討議の場となることをめざしている。

この日は岩城　剛氏（愛知学院大学）が，先にジュネーブで開かれたUNHCRによる「難民援助と開発」に関する専門家会議について報告を行った。(今後難民問題研究グループの報告を遂時 Trial & Error に掲載する。)

JVC NEWS

● JVC第1回会員総会開く

JVCでは，組織的確立を目ざして1年がかりで準備を進めてきたが，11月5日には東京で第1回会員総会を開き，会員の承認を得て正式に新しい組織体制で動き出した。

総会に先立ち，今年7月から4回にわたって「組織強化準備会」が開かれ，JVCの事務局員，ボランティア及び顧問的支援者の方々等によって，組織の形態や規約，構成員の位置づけなどが話し合われてきた。9月18日の第3回準備会で「規約」が成立し，これに基いて会員募集が開始された。総会までに200名4団体が入会し，134名（内，委任状79）が出席した。11月22日現在の会員数は，一般163名，学生27名。活動者51名，賛助23名，計264名および7団体。

総会では，準備委員長の岩崎駿介氏が挨拶に立ち，続いて見坊和雄氏が議長に選任されて議事に入った。JVC設立以来の活動の概況報告と基本方針，会員制施行の主旨説明の後，規約の要旨説明があり，総会において確認された。準備委員会の中の人事小委員会が，代表・執行委員・監査委員を推薦し，全員がその場で拍手承認された。(休憩時間を利用して，執行委員会がもたれ，事務局長が選任された。)

役員の氏名は右の通り。

休憩の後，岩崎新代表は世界的な情勢をふまえ，JVCの持つべき基本的性格についての所信を表明した。すなわち①相手の具体的な要求をつかんだ多面的対応をする。②長期的な視野を持つ。③市民性を失わない。④国際的ルールにのっとって活動する。⑤活動の継続のために，ボランティアの生命・生活を尊重する。

続いて星野新事務局長から，'83年度下半期活動計画と予算が説明され，会員により拍手承認された。最後に，斎藤ヒデ女史ら会場からの発言・スピーチに続き，見坊氏，栗野鳳氏，川口昌弘氏から各々熱いメッセージが送られて幕となった。

（総会の内容については，次のTrial & Error《33号，12月末発行》で改めて報告される。）

JVC執行委員

岩崎　駿介（筑波大学助教授）/JVC代表/
大橋　正明（シャプラニール事務局長）
熊岡　路矢（JVC本部事務局所属）
栗野　　鳳（UNHCR顧問）
見坊　和雄（全国社会福祉協議会理事）
スラポン・パドンキァット（JVCバンコク所属）
高塚　政生（JVCバンコク事務所長）
竹内　俊之（JVCレバノン駐在）
多田　正毅（城西病院院長）
室　　靖（東和大学教授）
ヤン・ミンジャ（UNHCR駐日事務所渉外担当）
星野　昌子（JVC本部事務局所属）/JVC事務局長

監査委員

笹尾　　勝（全国社会福祉協議会職員）
丹羽　秀夫（公認会計士）

尚，他に執行委員3名が国内活動者グループから選出されることになり，人選は執行委員会に委任された。

11月19日の執行委員会で，槌田　博（日本語家庭教師グループ）が執行委員に選任された。

ＪＶＣの活動は，みなさまからの募金で支えられています

難民救援活動をより充実したものにするため，以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

●インドシナ難民救援募金（９月小計　165,913円）

東京事務所を窓口にしてバンコクに送られ，各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。

●ボランティア募金

現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。

●クロントイ・スラム募金

バンコク，クロントイ・スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられます。

●デッグ・スラム奨学金　（スラム児童奨学金）

バンコク市内スラムの児童への奨学金などの学費援助，一口いくらでも可。（９月小計　1,011,000円）

●JVC運営経費募金　（９月小計　46,000円）

事務経費，人件費，通信費等，JVCの仕事を進めて行く上で欠くことのできない資金が慢性的に赤字となっています。

●アフリカ難民救援募金（９月小計　3,000円）

●レバノン被災民救援募金（９月小計　2,000円）

南部レバノンの難民キャンプに７月より，医師，看護婦，検査技師，身障者のための療法士などを派遣活動資金を募っています。

●日本語家庭教師募金

定住難民の家庭は遠い所が多く，交通費が負担となっています。また日本語教材費も必要です。

●医療募金（９月小計　49,945円）

緊急医療活動のための資金となります。

これまでの残金と合せて，レバノンへ医療器材を送りました。

郵便口座：東京７－96238

加入者名：ＪＶＣ東京事務所医療募金係

送金方法

住所，氏名，募金種目名を必ず明記の上，下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京9−27495

加入者名：JVC東京事務所

※　会計の都合上，「Trial＆Error」の購読申し込みとは別にご送金くださるようお願いいたします。

編集後記

こうしたNGOの活動においては，その活動を精神的・資金的にまたは労力の提供という形で支持する，広い層の人々の理解と主体的な参加とが結び合ったときに，それらの活力の総体として運動が成り立つ。

現地の人々や現場で働く者からの，的確な報告，切実な要請・問題提起等があって，それを伝えるのがこうした情報誌の使命である。同時にNGOの活動は，常に客観的な視点から検証され続けねばならない。読者ひとりひとりの忌憚ないご意見ご批判を仰ぎたい。

「Trial ＆ Error」年間購読申し込み方法

一般購読者　１口　3,000円（１冊送付）

賛助購読者　１口　10,000円（４冊送付）

郵便口座番号　東京３－54186

加入者名　ＪＶＣ東京事務所

住所，氏名，購読開始月をお書き添え下さい。

ＪＶＣより

新しいJVCマーク募集！

団体名の変更にともない，新しいJVCマークを募集しています。従来のマーク（右図参照）にとらわれず，斬新なマークをお寄せ下さい。

JAPANESE VOLUNTEER CENTER

尚，12月末で締め切らせていただきます。

●シンポジウム「世界の難民と人権」開催

12月９日から11日まで，東京四ッ谷の上智大学で「世界の難民と人権 ― 私たちの自覚と連帯をもとめて ― 」と題するシンポジウムが開かれる。分科会では，アフリカ，アフガニスタン，インドシナ難民および日本国内インドシナ難民の情況が報告，討論される。主催は上智大社会正義研究所，国際基督教大学，日本YMCA同盟。後援，UNHCR。問い合わせ先　03(238)3023，3695

●裏表紙　撮影　加藤　明彦，パナニコムにて

●本誌の記事・写真等の無断転載・復写を禁じます。

Trial & Error（試行錯誤トライアル・アンド・エラー）第31・32合併号
発行日　昭和58年11月20日発行（毎月20日発行）通巻31・32合併号
昭和57年8月16日第三種郵便物認可

JVCとは

Japan International Volunteer Center は1980年2月，タイのバンコクで設立された民間救援団体です。

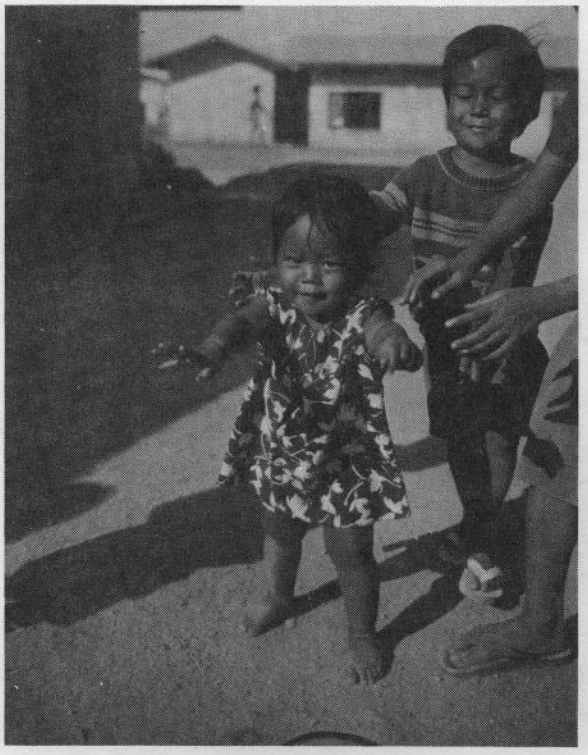
1979年の暮れの，インドシナ難民の大量流出をきっかけに，日本から救援に駆けつけた若者と，現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり，現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など，欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが，現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により，独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは，難民，そしてそれと同様の窮境にある人々に対し，できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが，タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや，バンコクのスラム街において活動を続けています。

またタイのみならず，カンボジア，ソマリア，レバノンで活動している他，日本国内でも定住希望者のための日本語教育を行っています。

東京事務所と京都連絡事務所は，こうした活動の情報，人材，資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。



発　行　所　日本国際ボランティアセンター
JVC東京事務所
〒166　東京都杉並区阿佐谷南
1-1-5　安田ビル3F
最寄駅　丸の内線新高円寺駅
TEL　03（316）3253

バンコク事務所　*Japan International Volunteer Center 67 South Sathorn Road Bangkok, Thailand TEL 286-4857*

京都連絡事務所　〒602　京都市上京区寺町今出川角
光月堂2F　TEL 075（256）1382

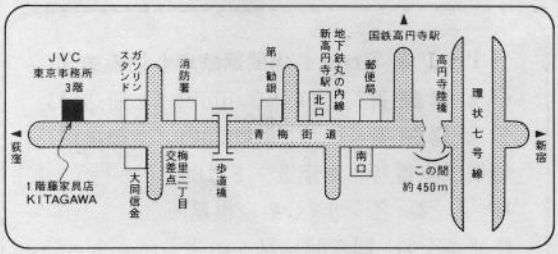
昭和58年11月20日発行
毎月20日発行
発　行　人　星野　昌子
編　集　人　本橋　栄

印　刷　所　㈱ベスト・プリンティング

『レバノン難民救援募金』緊急アピール

JVCでは，レバノン緊急事態に応え，これまで募ってきた『レバノン救援募金』を更に推進するため，**緊急アピール**を行っています。今こそ小さな支援が何倍にも活かされる時です。**緊急アピール**に，一人でも多くの方が御協力下さることを願っています。

英語・仏語の堪能な医師等も募集していますので，よろしくお願いします。



定価　送料共 500円